魔法少女あまね☆マギカHeart

詩神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ

【Ｎコード】
Ｎ１０８４Ｕ

【作者名】
詩神

【あらすじ】
仮面ライダー剣の物語から６年後のある日、相川始は見知らぬ青年からこの街に迫る危機を知らされる。
それと同じ頃、栗原天音は不気味な空間へと足を踏み入れる。
仮面ライダー剣×魔法少女まどか☆マギカの小説です。
多分、亀更新。

プロローグ

鹿目まどかが幾何学的な扉を開いた。
「……あっ？」
扉の向こうには絶望が広がっていた。
地上に聳え立っているはずのビル郡が壊滅している。

「ひどい…」
声が漏れる。
「仕方ないよ。彼女達では荷が重すぎた」
まどかが振り向くと白い、妙な生き物がいた。

「そんな…あんまりだよ、こんなのってないよ」
空を見上げるまどか。
ドレスを着た逆さまの女性のようなシルエットが空に浮かんでいる。
それに立ち向かっている3つの影がある。
一つは黒髪の少女。
一つは青いスーツに銀のアーマー。翼の生えた仮面の戦士。
一つは黒と赤のボディの仮面の戦士。

「でも、彼女達も覚悟の上だろう」
「諦めたらそれまでだ」白い生き物は淡々と言う。
「でも、君なら運命を変えられる」

「本当なの？」

「避けようのない滅びも、嘆きも、全て君が覆せばいい」

「そのための力が、君には備わっているんだから」
「私なんかでも、本当に何かできるの？こんな結末を変えられるの？」
黒髪の少女が何かを叫んだ。
その叫びがまるで聞こえていないような調子で白い生き物が言う。
「もちろんさ。だから僕と契約して、魔法少女になってよ！」

第1話「これ、かしてやるよ」

相川始が一人の客の元へと向かう。
トレイに乗せたコーヒーを溢さぬように慎重に客の前まで行くとコーヒーを置きながら言う。

「お客様、お待たせしました」

客は頷き、辺りを見回す素振りを見せる。

喫茶店、ハカランダの店内には相川始、この客、更に奥の席には三人の少女が座っている。
少女達の着ている制服は始の居候している家の一人娘、栗原天音の通う見滝原中学の物だった。

聞き耳を立てるつもりはないのだが53番目のアンデット、ジョーカーの人外の聴力が少女達の話している言葉を聞き取る。

―魔法少女―

アニメか何かの話しをしているのだろうか？

そんな事を考えていると客がごそごそとポケットから何かを取り出してテーブルに置く。

始はギョッとした。
それは6年前、共に戦った仲間達の持っていた物に酷似していた。
始が客を見る。

「俺は怪しいもんじゃねぇよ」

始は顔をしかめる。

「やっぱりお前がいるって事は剣崎は……」

彼が６年前の事を思い出す。

自分の為にその身をアンデットにした親友の事を。

「お前何なんだ？」

「今は言えねぇけど俺はお前、お前達の味方だ」

そう言って客はポケットからカードを取り出し、始に渡す。

それを見た始は驚愕する。それはスペードのカテゴリＡのカードだった。

「これ、かしてやるよ」

「……必要ない」

始はカードを返そうとする。

「天音ちゃんに……この街に危険が迫ってる。天音ちゃんの前でカリスやらジョーカーになるんは不味くねぇか？」

始は答えられない。

この日常を失うのは恐い。

いずれ消えなければならないのは解っている。

だがもう少しだけこの平穏な栗原親子との生活を楽しみたい。

「ブレイバックルは持ってるんだろ？」

客が静かに口を開く。

剣崎一真がジョーカーになった時に外したブレイバックル。
始はそれを拾い今も大切にしていた。

「ブレイドに変身するんなら誤魔化せるだろ」客はコーヒーを一気に飲み干す。

「とにかく、これから危ない事が起きる。必要なら橘さんとムッキーにも協力して貰えよ」

客は千円札をテーブルに置く。

「俺はこれからやらなきゃならんことがあるんでな。まぁアイツが来る頃には戻ってくるさ。そん時に全部話すよ」
客が店を出ていく。

始の手元に残ったのは客の置いていったスペードのAとハートの13枚のカード、彼の事を忘れない為に無理言ってかりたブレイバックルだった。

第2話「あなたを許さない」（前書き）

更新は不定期ですが完結はさせるつもりです。

もう一本連載してるほうも半年以上更新してないしな……。

どっちも早く完結させなければ。

詩神でした。

第2話「あなたを許さない」

栗原天音は下校中、不思議な生き物を見た。
赤い目に白い身体、猫の耳を長くした感じの耳を持つ生き物。
その生き物は天音に気付くと近付いてくる。
一瞬、腰を低くしてそれを見ようとしたが、その生き物があろうことか喋ったのだった。
「僕の名前はキュゥべぇ。僕は君にお願いがあって来たんだ」
キュゥべぇは口も開かず、天音の頭の中に直接響く声で言う。
「僕と契約して、魔法少女になってよ！」
意味不明な生き物に意味不明な事を言われた天音は今が現実かどうか確める為に頬っぺたを軽くつねる。
「……夢じゃない」
夢でしか有り得ないような状況に天音はふと笑う。
思えば6年前の仮面ライダーとアンデットの戦いを見ている天音にとってはあれすらも夢のような出来事だった。
「僕は君の願い事を何でも一つだけ叶えてあげる！その代わりに魔女と戦って欲しいんだ！」
―願い事―

そんなものはない。
天音は今の生活に満足している。
大切な家族がいて、友人がいて、好きな人もいる。
そんな天音に更に願い事を叶えると言うのは少々欲張りな気もした。
「別に、あたしは今の生活で満足してるから願い事なんてないよ」
キュゥべぇは残念だよとだけ言って去ろうとする。
その後ろ姿を見てから一つだけ願い事があるのに気付く。
自分の家に居候している青年、相川始に会わせたい人がいる。
その人は6年前に失踪していて始と親友だったのだ。
今でも時折見せる悲しげな笑みを見る度にその人が帰って来て欲しいのだなと思う。
キュゥべぇを追いかけようと走り出す天音。
しかしキュゥべぇはもう姿を消している。
ため息をついて再び歩きだすが、天音は再び不思議な物を見た。
普通の家の壁に刺さっている灰色の卵のようなもの。
それを見た天音の率直な感想はお洒落なピンの刺さったお洒落な卵のアクセサリ。
それを見ていると卵が不気味に、淡く輝き出した。

その卵を中心として不気味な空間が広がっていく。
言葉で説明するのは難しい。
ただ不気味な空間としか言えない。
あっという間に空間の侵食に飲み込まれ、天音は悲鳴を上げる。
悲鳴を聞き付けたのか、はたまた不気味な生き物達が近付いてくる。
『☆◎■△▼☆！』
意味の解らない言葉を発しながらカラフルな熊の姿をした生き物達は天音を取り囲み、ぐるぐるとダンスをしている。
「だ、誰か助けて！始さんんん！」
こんな場所に現れるはずのない人物の名を叫び、天音はしゃがんでしまう。
両手で顔を覆い、今にも泣き出しそうだった。
ドカンと物凄い音がした。
顔を上げるとカラフルな熊が真紅の炎に包まれている。
カラフルな熊はそれでもダンスを止めようとはしない。
だが炎が広がるにつれて段々と動きが鈍くなっていく。

「今の内よ」

凛とした声が響いた。

振り向くと黒髪の少女が立っている。

地味な感じだが何かのコスプレだろうか、日常生活では見ることのない服装をしている。

背後の炎が更に強まる。
炎に照らされ少女の顔立ちがハッキリと見える。
その顔立ちは整っていて表情も凛としている。
しかし何となくだが、凄く悲しい目をしている。

恐らく少女からは天音の顔は逆光で見えないだろう。

「早く。急ぎましょう」

少女が天音の手を引いて駆け出す。
背後から更に爆発音が聞こえる。

しばらく走っていると元のいた場所に戻ってこれたようだ。
そこには普通の住宅街が広がっていた。

「何だかわからないけど、ありがとう」

天音の言葉に少女が振り向く。

「あなたはっ……！？」

少女の凛とした仮面が一瞬だけ剥がれた。
驚きの表情を浮かべる少女は天音を睨み付ける。

「あなたを許さない」

そう言って少女は去っていこうとする。

「ま、待ってよ！あなた何なの？」

少女は振り向きもせずに応える。

「わたしは魔法少女。もし、あなたに甘い言葉で取り入ろうとする奴が現れても耳を傾けないで」

少女は歩き出す。

「あなたの名前は……？」

答えてはくれないだろうと天音は思った。

少女は呟いたように見えた。

暁美ほむら。

そう聞こえた。

第2話「あなたを許さない」（後書き）

ほむら登場しました。

ほむらの魔法少女服って何て表現すれば良いんだろうか……。

灰色のセーラー服と表現するのが一番だとだと思います。

そんなことを思い付いた詩神でした。

第3話「君は何者なんだい？」（前書き）

え～天音ちゃんの年齢については原作と相違があると思います。

確か劇場版で中学一年だったからまどマギの物語の舞台だと恐らく高校生。

と、言うことで天音ちゃんの年齢は気にしないでください。

あくまで剣のリイマジ世界だと考えてください。

ただし起こったことは原作と変わりありません。

第3話「君は何者なんだい？」

美樹さやかは上條恭介の見舞いの帰り道を歩いていた。

数ヶ月前、事故によって腕に後遺症が残りバイオリニストとしての未来を失ってしまった彼の見舞いに行くのが日課になっていた。

しかし、ここ最近はあまり行けないことに多少の罪悪感のようなものを抱いていた。

数日前、彼に頼まれたＣＤを友人の鹿目まどかと共に買いに行ったさやかは魔女の支配する結界の中で出会った巴マミに誘われ、魔法少女体験コースなるものにまどかと一瞬に参加していた。

キュゥべぇと契約し魔法少女になれば願い事を一つだけ叶えて貰える。

「僕としては早く契約して欲しいんだけどね」

白い生き物、キュゥべぇがさやかの耳元で囁く。

「うん。でもマミさんの言葉も一理あるし……」

『美樹さん、あなたは彼に夢を叶えてほしいの？それとも彼の夢を叶えた恩人になりたいの？』

『同じようでも全然違うことよ。これ』

『ごめんね。でも今のうちに言っておかないと。そこを履き違えたまま先に進んだら、あなたきっと後悔するから』

その言葉を思い出す度、さやかは胸が締め付けられるように思う。

「曖昧なまま願い事を叶えちゃったらあたし、きっと後悔する……」

そう言ってさやかは空を見上げる。

既に幾つかの星が輝き初めている。

その中の一つが一層輝きを増す。

「あれ？あれ星じゃ……」

何かが落ちてくる。

それも自分に向かって。

「キバババットォォォ～！」

そのコウモリの様な何かを咄嗟に受け止めてしまったさやか。

生き物と言うわりには硬い。

「ちょっ！何これ！」

キュゥべぇを見る。

「僕にも解らないよ」

キュゥべぇは本当にわからないようだった。

「痛ててて……。あ、どこの誰かわからないが受け止めてくれてありがとな」

そのコウモリが顔を上げる。

「いや、受け止めるって言うかアンタが突っ込んで来たんでしょ？てかアンタ何っ？」

「まぁ確かにな。とにかくありがとな」

コウモリが咳払いをしてから言った。

「俺様はキバットバット三世だ」

「いやそうじゃなくて！」

さやかの勢いが増す。

「キバットバット三世はキバットバット三世以外の何者でもない！」

自信満々に言うキバット。

「いやだから……、ってアンタ怪我してるじゃない」

よく見るとキバットの身体は傷付いている。

「あ、何か変な空間に飲み込まれて変な奴に襲われたんだ。それで命からがら逃げて来たって訳さ」

さやかはそれを聞いてその空間とは魔女の結界で、変な奴とは魔女の事だと思った。

「よく生きていたね。普通は生きて出られないよ」

さやかの肩に座っていたいたキュゥべぇが言う。

「そ、そんなに恐い所だったのか？って白いお前はなんだ！」

キバットが不思議なものを見る目で見て叫ぶ。

「キミに言われたくはないよ。キミは何者なんだい？」

キュゥべぇも不思議なものを見る目で見る。

「いや、あたしからしたらどっちもどっちだからね」

さやかのツッコミに不思議な生き物達が一斉にショックを受ける。

「ところで何故キミは僕が見えるんだい？」

それは愚問だった。

不思議な生き物に不思議な生き物が見えてもなんらおかしくはない。

「俺様が知るか！お前の方こそ何なんだ！？」

「僕はキュゥべぇ。人間の言葉を借りるならば魔法の国の使者いうところかな」

キュゥべぇがキバットに顔を近付けてくる。

「じゃ、じゃあ俺様もそんな所だ」

互いに疑問だらけなのは仕方のないことだろう。

「とにかく、俺様は事情があってこの世界に来たんだ！おい女！お前がこの世界の仮面ライダーか？」

キバットはさやかを見る。

「あたしはさやか。美樹さやかよ！なによ仮面ライダーってそんなの……」

知るわけない。

キバットはそう続くと思った。

「確か何年か前にそんな噂があったような……」

その噂の内容とはこうだ。

夜な夜な、異形の怪物と戦う鎧の男達。

テレビなどのメディアでも特集されていた。
仮面ライダーに助けられたという人達も現れた。
写真なども数枚撮影されたが、どうせ偽物だろうと言われていた。
「仮面ライダーか。本当にそんな人たちがいるのなら興味深いね」
キュゥべぇが横から口をはさんでくる。
「俺様はそれを探してるんだ。キュゥべぇがライダーと関係してるんだと思ったんだが……」
確かにキバットの知るライダー達は自分も含め特殊な力が関係している事が多い。
キバットがキュゥべぇをライダーの関係者だと勘違いするのも無理はない。
「まぁいろいろとありがとな！俺様は忙しいんだ。これで失礼させてもらうぜ」
そう言ってキバットが羽ばたこうと羽を動かすが、上手く飛べなかった。
「ちょっとアンタ。手当てしてあげるから大人しくしなさい！」
少し考えてキバットが頷く。
「ただいまー」
先程の体験の興奮も覚めぬ中、天音が家の玄関の扉を開ける。
「おかえり。天音ちゃん」

夕飯の準備をしているらしき始がダイニングから顔を出す。
天音は着替えを済ましてからダイニングに降りていく。
天音の母の遥は数日前から具合が悪く、今は寝室で休んでいる。
天音は最後の皿をテーブルに置き席に着く。
始も準備を終える。
「いただきまーす」
「いただきます」
天音と始が手を合わせ夕飯を食べ始める。
先程の体験を忘れようと天音は今日の出来事を楽しげに話し始める。
「でね。マミさんも始さんの紅茶は美味しいって言ってたよ」
マミさんと言うのは巴マミという天音のクラスメイトの事だ。
数日前、天音の家だということを知らずに巴マミが友人達と紅茶を飲みにきたらしい。
それがきっかけで天音とマミは仲がよくなったらしい。
見滝原中学の生徒と言うことはもしかしたら今日、来ていた娘達かも知れないと始は思った。
「もしかしてブロンドの髪の娘かな？」

始が何となく言ってみる。

「あ、そうだよ。最近は二年生の娘達と仲が良いみたいね。名前は知らないけど野球部の娘かな？でもうちの中学に女子野球部ってあったっけな……」

それならば恐らく間違いはないと思った。

マミらしき少女の他に二人の少女がいた。

一人が突然野球のバットを出していたから間違いない。

「今日はアニメか何かの話をしてたみたいだね。魔法少女がどうとか」

聞き耳を立てるつもりはなかった。

ただ聞こえてしまったのだから仕方ない。

「え、まほうしょうじょ？」

偶然だろうか。

天音自身もその言葉を今日聞いていた。

「今、そんなアニメが流行ってるの？」

天音は答えない。

天音は何かを思い立ったように無言で夕飯を終える。

いつもなら後片付けを手伝う天音だったが、今は確かめたいことがある。

それが最優先だ。

天音は部屋に戻ってから携帯でマミに電話をする。

『もしもし、天音さん？』

マミの声が電話の向こうから聞こえる。

「あ、マミさん？ちょっと聞きたいことが……」

言ってからどう聞けば良いのか迷った。

「ん、いえ、実は今日ね変なものを見たの」

天音はすぐさま今日出会った不思議な生き物の事を話し始めた。

これならば直接聞くよりは良いだろう。

直接言って間違っていたら単なる痛い娘だが、冗談っぽく言えば多少は痛い娘のレッテルは回避されるからだ。

『……それ、本当？』

マミの声は真剣だった。

「信じてくれるの？」

マミは少し間をおいてから詳しいことは明日、話すとだけ言った。

まさか始の話しからこんな事態になるとは思わなかった。

自分が体験した出会いと悪夢。

始が言った魔法少女の話しとバットを持った娘。

見滝原中学には女子野球部もソフトボール部もない。

そのバットとは恐らくあの異形の怪物に対する護身用だろうか。

あんなものであの怪物がどうにかなるとは思わないが。

天音は電話を置いてキュゥべぇの言葉を思い出す。

願い事を一つだけ叶えてくれると。

そして親友との再会で喜ぶ始の笑顔が思い浮かぶ。

第3話「君は何者なんだい？」（後書き）

え～、この世界のマミさんはぼっちではありません。
ある程度友人はいるということにしてください。
あと確定はしてませんがあの二人組が出るかもしれません。

地獄兄弟？

ふっ、違うな。

ヒントは白と黒の二人組です。

第４話「さやか、いままでありがとう」（前書き）

最近思った事。

俺って心理描写を書くのが苦手だなと思った。

どうしてもストーリーで驚かせたいと思ってしまう。

そんな駄文で良ければお付き合いください。

詩神でした。

第４話「さやか、いままでありがとう」

栗原天音は巴マミに連れられ学校の屋上を訪れた。
そこで待っていたのは二人の少女と一匹の獣。

二人の少女が不審そうな目で天音を見る。

「紹介するわね。彼女は栗原天音さん。私の同級生で……」

マミはキュゥべぇを見る。

「魔法少女候補さ。また会ったね」

キュゥべぇがニッコリと笑う。

「それでこっちが鹿目まどかさんと美樹さやかさん。二人もキュゥべぇに選ばれて魔法少女がどんなものか学んでもらってるの」

マミが天音に二人を紹介する。

まどかとさやかが会釈をする。

「じゃあ天音さんに説明するわね」

マミが黄色い宝石を取り出す。
淡く輝いている。

「これはソウルジェム。魔法少女が生み出す魔力の源よ」

天音がソウルジェムを覗き込む。

「……綺麗」

天音は呟く。

「これを使って魔女を探すの。魔女って言うのは……」

マミが続けようとする。

「魔法少女が希望を振り撒く存在ならば、魔女は絶望を撒き散らす存在さ」

キュゥべぇが言う。

「つまり魔法少女の敵ってこと？」

天音は仮面ライダーとアンデットの図を魔法少女と魔女に当てはめる。

ただアンデットと魔女は行動原理が違うのだろうから正確には同じとは言えない。

「そうね。魔女や魔女の手下の使い魔を放っておいたら大変な事になるわ。理由のわからない自殺や殺人事件は大体が魔女の仕業ね」

マミは深刻な顔をしている。

「だから私達、魔法少女がいるの」

「マミさんの他にも魔法少女がいるの？」

それは当然の質問だ。

天音自身、マミ以外の魔法少女を見ているのだから。

「もちろんいるわよ。ただグリーフシードが目的の娘もいるから一概に仲間とは言えないのよね」

グリーフシードとは魔女の卵で、持っていると魔力回復に役立つアイテムだとさやかが説明する。

恐らくマミから聞いたことだろうと天音は理解する。

「話しは戻るけど願い事を叶えてあげる代わりにソウルジェムを魔法少女に与えるのが僕の役目さ」

つまりは願い事を叶えてもらう代わりに戦えということかと理解する。

昨日のキュゥべぇの口振りからして予想はついていた。

「願い事は何でも良いの？例えば、いなくなった人に会いたいとか……」

キュゥべぇは頷く。

「それでも良いよ。ただ死んでしまった人を生き返えらせてとかは無理だけどね」

ならば自分の願い事は恐らくは叶うと天音は心の中で思う。

彼は旅に出たと聞いている。

「それは天音さんが会いたいの？それともその人と会わせたい人がいるの？」

天音はマミを見る。

「会わせたい人がいるの」

それを聞いたマミが少し考える。

「昨日、美樹さんにも言った事だけど、それはその人に恩人になりたいの？それともその人に喜んでもらいたいの？」

天音は答えられない。

「願い事を決めるのはそれが吹っ切れてからにしたほうが良いわよ。じゃないと天音さんは後悔することになるかもしれないし」

マミの言葉が重く感じる。

「それじゃあ今日はおしまい。美樹さん、今日は用事があるとか言ってなかった？」

さやかが携帯の時計を覗く。

「あ、ごめんなさい。あたしそろそろ行かないと」
隣にいたまどかも頷く。
「マミさん達はこれからどうするの？」
マミは天音を見る。
「わたし達はこれからわたしの家に行くわ。天音さんにはもっと魔法少女の事を説明しなくちゃいけないしね」
天音も頷く。
こうして天音はまどかとさやかと別れた。
キュゥべぇもまどか達についていくようだった。
「さぁ、天音さん。行きましょう」
美樹さやかがゆっくりと上条恭介の病室の扉を開ける。
さやかがベッドの隣の椅子に座る。
「さやか、いままでありがとう」
突然、上条恭介がそんな事を言った。
「え？恭介いきなりどうしたの？」
さやかは少し驚いた。
いつもの上条恭介ならばそんなことは言わない。
「僕の腕、もう無理なんだって。だからもう来なくていいよ」

恭介は静かに言う。

「先生に言われたんだ。もう諦めろってさ……」

今の恭介は明らかにオカシイ。

開いた窓から吹き込んでくる冷たい風がさやかの頬に当たる。

「おいさやか！何か変な感じがするぞ！」

さやかの手提げ袋から声がする。

昨日、家に連れ帰ったキバットバット三世だ。

「え、ちょっとどういう……」

さやかが言い終わる前にキバットが叫ぶ。

「昨日俺様を襲った奴が近くにいる！！」

叫ぶと同時に恭介が開いた窓から身を乗り出す。

それと同時にキバットがまだ完治してない翼を使い恭介に向かって羽ばたく。

恭介の姿が視界から消えた。

同時にキバットも視界から消える。

窓から落下したのだ。

さやかは声にならない叫びを上げる。

何を叫んだかわからない。

ただ叫んだ。

第４話「さやか、いままでありがとう」（後書き）

なんか俺が書くといろいろ絶望展開になってしまう……。

最後はハッピーエンドでしめたいのにな。

そんなネガティブな詩神です。

第5話「これで！終わりよ！」（前書き）

何かマミさんがただの悪人にしか見えない。

そして《さやほむ》という新たなジャンルが……あるわけねぇよな。

第5話「これで！終わりよ！」

さやかの周りの空間が歪む。

不気味な空間だった。

その空間をさやかは知っている。

それは魔女の結界。

人間が足を踏み入れたら最後、もう戻れない。

使い魔に殺されるか、魔女に殺されるかの違いだけだ。

さやかは魔法少女ではないので一人で結界を抜けることは不可能。

尤も、上条恭介がいない世界で生きていても仕方がない。

このまま使い魔に殺されても良いとすら思えた。

『さやかちゃんっ！』

頭の中に親友の声が響いた。

キュゥべぇの能力の念話である程度の距離ならば話せる事を思い出す。

『さやか！少年は俺様が助けたぜっ！』

更にキバットの声で希望の一言が聞こえて来る。

「え？ど、どうやって……？」

『まどか。マミを呼びにいこうよ。さやか。どこかに隠れて時間を稼ぐんだ』

さやかの質問に答えずキュゥべぇが言う。

さやかは大人しくキュゥべぇの指示に従う事にした。

さやかはどこか物陰に隠れる事にして、辺りを見回した。

見れば見る程不気味な空間だ。

病院のベッドの様なものもあればお菓子のような看板が立っている。

「何故アナタがいるの？」

見るのに夢中で背後に気を配っていなかったさやかはビクッと震えた。

振り返るとさやかを不快にさせる人物がいた。

転校生、暁美ほむら。

さやかの認識ではグリーフシード目当ての魔法少女。

「それはこっちのセリフよ！何でアンタがっ」

ほむらは無表情で言う。
「別に。ただ魔女が結界を張ったから来てみただけ」
ほむらの言葉に嘘はないように思えた。
こんな事で嘘をついても仕方のない事だ。
「だったら早く魔女を倒しに行きなさいよ！」
「そうしたい所だけど、とんだ足手まといに出会ってしまったわ」
さやかはその言葉にムッとした。
「あたしの事なんかほっときなさいよ！どうせグリーフシード目当てなんでしょ？」
ほむらは悲しげな表情を浮かべる。

「アナタが死んだらまどかが悲しむ。だからこの結界を抜けるまでは黙って言うことを聞いて。さもないと……」
ほむらの手には拳銃が握られている。
ここで騒げばほむらは本気で撃つと思った。
理由はわからないがまどかを悲しませたくない。

本気でそう思っている。
まどか以外はどうでも良い。
まどかを悲しませるものは許さない。
それが例え自分であっても。
「わかった。今回だけね……。少ししたらマミさんも来るし。それまでは大人しくアンタの言う通りにするよ」
マミという名を聞いてほむらの表情が一瞬だけ動揺の色を見せる。
「そうしてくれると助かるわ……」
ほむらは歩き始める。
その後ろを追ってさやかも歩きだす。
「アンタってさ。何でそんなにまどかに拘るの？」
答えなど期待してない。
「……じゃ、魔だから」
そんな事は聞いてはいない。
そんな嘘は聞いてはいない。
ほむらの事は嘘だ。

「違うね」

「違くないわ。わたしはただ鹿目まどかの魔法少女の才能が憎いだけ。彼女が魔法少女になったらわたしのグリーフシードが全部……」

先程とは言っていることが違う。

先程のが本音なのか今のが本音なのか、考えるまでもない。

「違う。だってそれが本当ならすぐにでもまどかを……」

―殺せば済むじゃない―

「黙りなさい」

振り向きざまに拳銃を向けてくる。

「……ごめん」

向けられたのが拳銃だけならばさやかは何か言い返してただろう。

しかし、さやかに向けられたのは拳銃と、ほむらの涙だった。

しばしの沈黙の後ほむらは顔を上げ、行きましょうとだけ言った。

さやかの中にいままでとは違うほむらが見えた気がした

どれくらい進んだだろうか。

もしかしたらマミやまどかがもう魔女を倒してもおかしくはないよ

うな時間が経っていた。
開けた場所に出る。
よくは見えないが高い椅子の上にぬいぐるみが座っている。
「隠れなさい」
ほむらは言って構える。
刹那、ほむらを黄色いリボンが現れほむらを拘束した。
「邪魔しないで。魔女を倒したら解いてあげるわよ」
「……バカな事は止めて」
そのままでほむらは言う。
物陰からマミ、まどか、天音が出てくる。
まどかと天音はほむらを拘束するのに納得がしてない様子だった。
「美樹さんも早く隠れなさい。すぐに終わらせるわ」
「ちょっとマミさん！コイツの拘束をっ……」
さやかが言う前にマミが高く跳躍する。
跳躍しながら空中にマスケット銃を展開する。

その勢いで銃を握り周りの使い魔を撃ち、殴り、避けを駆使して立ち回る。

「これで！終わりよ！」

高い椅子を崩してぬいぐるみを落とす。

それを銃の柄で殴りつけ、彼方までぶっ飛ばす。

「ティロ！」

マミが巨大な銃、否、砲を召喚する。

「ダメ！」

ほむらは叫ぶがマミには聞こえない。

「フィナーレ！」

閃光がぬいぐるみの魔女を貫く。

終わった。

マミはそう思ったに違いない。

確かに終わる筈だったのだ。

《トルネード》

ぬいぐるみの口から何かが出てくる。

コミカルな顔のある巨大なイモムシ、蛇、龍、ムカデ。

何と表現して良いかわからない何か。

それがぬいぐるみから吐き出された。

第5話「これで！終わりよ！」（後書き）

本編まどか☆マギカをハッピーエンドに導く方法。
1、ほむらが誰かに頼る。
これはバットエンド対策としては微妙。
ただし誰かに頼らなければノーマルーエンドにすらならない。

2、マミさんの死亡回避。
誰かが助ければ何とかなるかも。
ただしマミ関係で別の問題が発生する可能性有り。

3、さやか魔女化回避。
上条とくっつく。もしくは納得して諦める。

4、自動的に杏子生存。
さやかが魔女化しなければ杏子も死ぬことはない。

5、まどか神化阻止。
願い事以外の方法で魔法少女システムを都合の良いように破綻させればもしかしたら……。

他にもハッピーエンド条件はあるかもな。
そんな事を考えてた詩神でした。

第６話「俺は、仮面ライダーだ」（前書き）

先日、参考資料としてブレイド劇場版を見ました。

……天音ちゃん十四歳。

２００８年の話しだし、いろいろ設定間違ってるな……。

ま、まぁやっちまったもんは仕方ない。

あまね☆マギカＨｅａｒｔ、始まるよ！

第６話「俺は、仮面ライダーだ」

相川始は病院にいた。

始は天音の母、栗原遥香の薬を頼まれていた。

ロビーで待っている間、始はあの青年の事を考えていた。

何故、剣崎のジョーカー化や自分達の事を知っているのか。

自分がジョーカーだということも知っている風だった。

更に青年の持っていたバックル。

ブレイドやギャレンのバックルでターンアップ方式のバックルのようだった。

つまりあれが開発された時期から推測するに、ブレイバックル、ギャレンバックルと同時期、もしくはそれより前に開発されたものだと思われた。

そして渡されたカテゴリＡのカード。

ラウズカードは自分の持つハートのカテゴリの１３枚以外は橘朔也に預けた筈だった。

カードが盗まれたのならば何らかの連絡があるはずだが連絡はなか

った。

あの後、橘朔也に連絡を取りカードの事や青年の事を話した。

橘朔也もこの事を調べ始めると言っていた。

それと天音にも注意を払うことにした。

本当はすぐにでも学校へ向かいたいのだが、こちらの用事も重要なのだ。

遥香の具合が良くない。

まるで呪いのように日に日に悪化しているように見える。

今は薬で対処しているが、医者から入院の話しがあるのも時間の問題かも知れない。

ふと顔を上げると天音と同じ制服の少女がいた。

年頃から天音より少し下だろうか。

ツインテールの少女とショートヘアの少女。

始は思い出した。

昨日、ハカランダに来ていた三人の内の二人だった。

ショートの少女はツインテールの少女に何かを言った後にエレベーターに乗る。

ツインテールの少女が始の向かい側のソファーに座る。
その少女から何か不思議な感覚が伝わってくる。
正確には少女の違くの気配。
何かがいる。
自分の中のジョーカーではない部分。
ヒューマンアンデットの部分が何かを感じ取る。
「君は見滝原中学の生徒かな？」
何気なく話しかける。
少女は始を見てから頷く。
「あ、はい。二年生です」
少女は始に話しかけられ戸惑っているらしい。
「知り合いの娘さんが見滝原中学なんだよ。その娘さんは三年生なんだ」
「そうなんですか。三年生なら……」
『まどか気をつけて。彼は人間じゃないよ』

始の頭の中に声が響く。
少女と始の顔が強張る。
『キュゥべぇそれどういう事？』
今度は少女の声が響く。
『彼は多分、アンデットだ』
何かが少女にそう告げた。
「ソレイジョウシャベルナァッ！」
少女はビクッとして身を引いた。
言ってから始はぎこちない笑顔を作る。
「ご、ごめんなさい」
少女が逃げるように席を立つ。
そして少女はロビーの出口から出ていく。
「キャァァァァ！！」
直後、少女の悲鳴が聞こえた。
始は駆け出して病院の外に出ていく。

少女がビクビクと震えている。

「大丈夫か！」

少女が振り向く。

少女の向こう側にうつ伏せの人が倒れている。

少年だった。

始は少年の脈をとる。

息はある。

始は上を見ると窓の開いた部屋がある。

恐らく窓か屋上から転落したのだろう。

「早く人を呼んで来るんだ！」

始が言ってから少女が病院の中に駆けていく。

「誰かぁ～助けれてくれぇ～」

少年の下から声がする。

本来ならば動かさないほうが良いのだが、始は仕方なく少年を軽く持ち上げる。

すると小さなコウモリのようなものが少年の腹部から這い出してく

る。

「ぶわぁ！死ぬかと思ったぁ～」

コウモリが言う。

「こっちです！」

病院の入口から少女の声がする。
人をつれて戻ってくるゆうだ。

始は面倒なことになりそうだと思いコウモリと少年を残しその場を去る。
少し回り道をして病院に戻ってくると再びソファーに座る。

早く薬を受け取りたい。
そうしなければ警察が来て面倒なことになるなと考えた。

一応、偽名や偽の住所などを考えておいた。

もちろん免許証などは持っていないのでバイクで来たなどとは話せない。

しかし一向に警官は来ない。

もしかしたら病院はこの事を揉み消すのかも知れない。

始に取ってはそのほうが都合が良い。

しばらくしてから薬を受け取る。

病院から出ると駐輪場に止めてあるバイクに跨がる。

エンジンを掛けようとした瞬間、周りの景色が一変した。

こんな景色が常識的にあるはずはない。

ベッドやお菓子のようなものが見られるが、まるで関連性があるようには見えない。

その景色の中に道がある。

奥に進むしかなさそうだった。

始はバイクを転がしながら歩く。

もしかしたら青年が言っていた危機とはこの空間に関係があるのだろうか。

否、間違いなく関係あるのだろう。

ジョーカーの本能が言っている。

―この場所は危険だ―

出来れば早く抜け出したい。

『マミ！魔女が目覚める！急ごう』

先程聞いた不気味な声。

誰かと一緒にいるのだろうか。
先程の少女とは違う名前を読んでいる。
『まどか、天音も気を付けて！』
その名前を聞いた途端、始の表情が強張った。
「天音ちゃん！」
始は叫んで愛車のバイク、シャドウチェイサーに跨がりエンジンを掛ける。
そしてアクセルを全開して走り出す。
天音にも危機は迫っている。
状況からして天音の近くに戦える者は一人。
敵がどんなものかはわからないが、一人では戦えない者を守りきれないかもしれない。
―ブレイドなら誤魔化せる―
青年の言葉が頭を過る。
間違いな。
青年はこのような状況を想定してカテゴリＡのカードを渡してきたのかもしれない。

それならば始には都合が良い。

ジョーカーやカリスの姿はアンデットソノモノの姿だ。

ブレイドならば強化スーツを着た人間に見える。

これならば天音にも言い訳出来る。

少し走るとこの道の先に開けた場所が見える。

『ダメ！』

誰かの叫びが聞こえる。

本能が告げる。

誰かが死ぬ。

すぐにトルネードホークのカードをシャドウチェイサーにラウズする。

『トルネード』

シャドウチェイサーが風を纏う。

風を纏ったバイクで体当たりする技。

トルネードチェイサーだ。

開けた場所に飛び出す。

ぬいぐるみの口から巨大な蛇のようなものが出ていて、その牙が捉えようとしているのはブロンドの髪の少女だった。

トルネードチェイサーで蛇に体当たりする。

ドゴンと鈍い音がして蛇が横に吹き飛ぶ。

始はその衝撃に耐えきれずに投げ出される。

ブロンドの髪の少女は呆けていて、その場にへたり込む。

「始さん！？」

物陰から天音が飛び出してくる。

「天音ちゃん！下がっててて！」

始はワザとらしくバックルにカードを装填する。

そして思い出す。

彼の動作を。

左手でバックルを着ける。

右手を左に出して掌を自分に向ける。

電子音がなる。

擬音で表すならばシャキーンシャキーン。
自分に向けた掌を反転させ、同時に引っ込めながら左手を前に出す。
「変身！」
バックルから青いゲートが出る。
そして駆け出してゲートを潜る。
潜り抜けた瞬間、青いスーツに銀のアーマー。
白銀の刀身を携えた仮面の騎士の姿になる。
「えっ？剣崎さんの……」
それは天音も知っている姿だった。
「なによあれ！」
ショートの少女、さやかが言う。
「魔法少女じゃ、ないよね？」
まどかも何が起きたか理解できないようだ。
「あれは……」
拘束された少女、ほむらが何かを思い出すように呟く、

「ウェイ！」

ブレイドが魔女、シャルロッテに斬りかかる。

シャルロッテは起き上がりブレイドを丸呑みにしようと口を大きくあけるがブレイドがその前に跳躍する。

そして降り立ったのは高い椅子の上。

シャルロッテが追って口を開けたまま飛び掛かる。

が、ブレイドは更に別の椅子に飛び移る。

ただ飛び移るわけではない。

すれ違いざまに攻撃を仕掛けている。

それが何回か続くとシャルロッテは舌を出す。

どうやら疲れたらしい。

その間にブレイドは三枚のカードをラウズする。

それは本来ならばハートのライダー、カリスの必殺技だった。

―フロート―

―ドリル―

―トルネード―

三枚のカードがブレイドに宿る

―スピニングダンス―

ブレイドが浮き、風を纏い、回転しはじめた。

そしてフロートの力で更に高く舞い上がり、ドリルの力で回転数を上げ、トルネードの力で風に押し出される。

高速で回転するブレイドがシャルロッテを貫く。

ドゴンと爆発音がしてシャルロッテが爆散した。

ゆっくりと地面に降り立った。

「アナタ、何者なの？」

拘束されたまま、ロングの少女ほむらがが言う。

ブレイドは顔だけそちらに向ける。

「俺は、仮面ライダーだ」

第6話「俺は、仮面ライダーだ」（後書き）

ついに変身まで来ました。
そしてマミさんマミらなくて済んだ。

次は原作だとさやか魔法少女化か。

いくら始が介入しても変えられない運命もあるからな……、それも含めて楽しんでください。

第7話「そのアイテムくれ！」

巴マミはあの日以来、戦えなくなっていた。

魔女を見つけ戦おうとすると足が震え、涙が出てくる。

その度に相川始や暁美ほむらによって救われてきた。

もう何度目だろうか。

わからない。

戦えない自分など必要ない。

正義の味方でなくなった自分は要らない。

「マミ、あまり調子が良くないみたいだね」

一人、ベッドで横たわっているマミにキュゥべぇが話しかけてきた。

「そうね……。怖いのよ。あんなこと初めてだから……」

あの時を思い出して身震いする。

涙もながしている。

「なら、僕と一緒に来るかい？僕がキミを戦えるようにしてあげるよ！」

その言葉にマミが飛び付いた。

戦いたい。
正義の魔法少女として。
例えそれが悪魔の囁きでも構わない。

「なら、町外れの研究所後に来てよ！」

マミは頷き、フラフラとした足取りで家を出た。
「でぇ？お前がこの世界の仮面ライダーなのか？」
始の部屋でキバットバット三世がそんなことを聞いてきた。
他の人間には聞かれたくない話しらしい。

「正確には違う。俺は仮面ライダーと言われた存在ではない」

そう、世間で都市伝説の仮面ライダーと呼ばれていたのはブレイド、ギャレン、レンゲルの三人。
最後の闘いの後、天音の叔父の虎太郎は前々から執筆していた資料を全て破棄した。

もし、本を出して天音が読んでしまったら始がアンデットだとバレるかも知れない。

ならばカリスの部分だけ省けば良いとは言ったのだが、虎太郎自身は真実を書きたいんだと言って聞かなかった。

話しは戻るがカリスと呼ばれた自分はライダーではない。

あの姿はマンティスアンデットの姿。
あの時はついノリで言ってしまったようなものだ。
「ならそのブレイドに会わせてくれよ」
その言葉に始は首を振った。
「ブレイドは……、会えない。……旅に出たんだ」
「じゃあ変身アイテムは？お前持ってたよな？」
一体キバットの目的は何なのだろうと考えたが、考えるまでもなかった。
「そのアイテムくれ！俺様の知り合いで困ってる奴がいるんだ」
始は棚の隅に留まっているキバットを乱暴に掴んだ。
ケガをしていて飛ぶことが出来ないそうだ。
「ダメだ。これは大事な物だ。それに、今はこれが必要だ」
始はキバットを下ろす。
「わかったよ！じゃあお前には用はねーよーだ！」
嫌な風に言ってキバットは飛ぼうとするが出来ない。
始は溜め息をついて何処に行きたい？と問う。

キバットは少し考えてから上条恭介の所と告げる。
あんな事があったのだ。
様子が気になるらしい。
時計を見るとまだ面会出来る時間だ。
会えるかどうかは別にして始はキバットを上条恭介の所に連れて行く事にした。
「睦月、これを見てくれ」
橘朔也はパソコンのディスプレイを見ながら上城睦月を呼び寄せ言った。
「橘さん。これは……？」
睦月がディスプレイを見ると二つの折れ線グラフの比較画面のようだった。
「右のがアンデットが戦闘不能に陥った時に放出されるエネルギーを解りやすくしたものだ」
橘は説明を続ける。
「そして左が世界各地で観測されるエネルギーをグラフ化したものだ」
二つのグラフは良く似ていた。
違うのはエネルギーの大きさだけだった。

「これはＢＯＡＲＤの発足当時から観測されている」

つまりＢＯＡＲＤの発足前、もしくは人類が誕生した時からこのエネルギーは放出され続けていたのかもしれないということだ。

「天王寺の技術で手に入れた封印の石も反応しているんだ」

橘は椅子を回転させ幾つものコードが繋がれた黒い物体を見る。

今は天王寺の技術により反応はするが、その場所までワープしていくことはない。

「相川の連絡によると魔法少女や魔女、キュゥべぇの存在が関係している可能性がある」

睦月は橘の言わんとしている事が分かった。

「つまりこれを利用すれば魔女の結界の場所を特定出来るかも知れないと？」

橘は頷く。

「アンデットサーチャーを応用すればなんとかなるかもな」

そう言った瞬間、パソコンから異常を告げるベルが鳴る。

「なんだ！？これは……ハッキング！」

橘がパソコンを操作し始める。

「橘さん！」

ディスプレイが目まぐるしく変わっていく。

「天王寺の技術のデータと伊坂のデータが抜かれてる！」

橘が叫ぶ。

ハッキング対策のセキュリティは運用されているが、ソフトが追いつかない。

「こんなの人間の出来る事じゃない！」

橘が口と目を開けて叫んでいる。

「ウワァァァァァ！！」

何が起きたか解らない。

あっという間に二つのデータが全て抜かれてしまった。

町外れの研究所後。

キュゥべぇが耳を器用に使いキーボードを操作している。

「さぁマミ、これで君は戦えるようになるよ」

巨大な水槽の中にマミの姿はあった。

呼吸器を着け、服装は何も着ていない。
水槽の中にはドロドロした植物のようなものが漂っている。
「これも面白そうな技術だ」
キュゥべぇが呟く。
「これは使えるかもしれないな」
赤い瞳が輝く。
マミは反応すら示さずにただ虚ろな瞳で水槽に身を委ねている。
「さて、これから忙しくなりそうだ」
キュゥべぇは最後にキーボードのボタンを大きく叩いた。
水槽から水が抜かれていく。
そしてマミが立ち上がる。
その表情は闘争本能という快楽に歪んでいた。

第7話「そのアイテムくれ！」（後書き）

まさかのマミさん海蘊漬けｗｗｗ

自分で想像して吹きました。

笑いの沸点が低いなと思った今日この頃の詩神でした。

第8話「それ、死亡フラグって奴じゃね？」（前書き）

野郎共！ついに俺の嫁の登場だ！性格はちょっと柔らかくなってるかもしれないけどなヒャッハー！

第8話「それ、死亡フラグって奴じゃね？」

あの時。

『死んじゃえば良いんだよ！もう生きてるのが嫌なんだろ？夢を叶えられないなら……』

上条恭介の頭の中にそんな声が響いた。

あまりにもハッキリと聞こえるので自分が狂ってしまったのだと思った。

実際、狂っていたのだろう。

その声は段々とハッキリと、狂気じみて来ていて、恭介は耐えられなくなっていた。

恐らく、幼なじみのさやかが見舞いに来なければもっと早くあんな恐ろしいことをしていただろう。

尤も、遅かれ早かれ結果は変わらなかったのかもしれない。

自分が助かった理由も解らない。

普通ならば確実に地面に激突して、脳髄がぐちゃぐちゃに潰れていた。

しかし、恭介は助かった。

意識が朦朧として何が起きたのかはあまり覚えてはいない。

ただ、腕に痛みが走ったのは覚えている。

その痛みがしてから恭介はさやかの事を考えていた。

彼女の目の前で飛び降りたのはせめて、自分の事を覚えていて欲しいという考えが少なからずあったのかもしれない。

狂ってる。

恭介自身そう思っている。

だから、事故で動かなくなった腕が普通に動かせたことも驚かない。

精神的にも、肉体的にも狂ってしまったのだから仕方がない。

ただ腕に不気味な痣が浮き出ているのは気になった。

―コンコン―

ノックの音がしてドアノブがカチャリと回転する。

ドアが開き入って来たのは見知らぬ青年だった。

ジーンズに白いTシャツ。

疲れた感じのコートを羽織っている。

「どなた、ですか？」

掠れた声で恭介が言う。
青年は答えずにベッドの隣の椅子に座る。
「どなた、ですか？」
もう一度、青年に問う。
「相川始だ。美樹さやかの知り合いでもある」
始はぎこちない笑顔を浮かべる。
「名前だけはさやかに聞きました」
確かさやかの先輩の家の喫茶店の居候だと思い出す。
「おいおい！俺様も忘れんなって！」
始の懐からコウモリが飛び出してくる。
恭介はびっくりして悲鳴を上げそうになるがなんとか圧し殺す。
コウモリはすぐにシーツに落ちる。
「おい上条恭介！」
コウモリ、キバットが恭介を見る。
「は、はい！？」

ビクッとして声が上ずってしまった。

「大丈夫か？」

何が恐ろしいことを言われるかと思ったのだがキバットの口から出てきたのはそんな気遣いの言葉だった。

「あ、は、はい……」

「ならよ～し！これなら心配なさそうだな！」

どうやら知らぬ間に心配かけていたらしい。

「もうあんなことするなよ？俺様がいなかったらどうなっていたやら……」

あんなこと？

いなかったら？

その言葉を聞いて恭介は落下しながらの記憶を少し思い出した。

小さくなっていく窓から飛び出して来たのはこのコウモリだったと。

そして自分を持ち上げてくれたのだと。

「あの時は、その……ありがとう」

キバットはウンウンと頷く。

「その様子だと本当に心配ないようだね」
恭介は笑って頷いた。
始も何処と無く嬉しそうだった。
「まどかちゃんの悲鳴が聞こえた時は何事かと思ったよ」
その時、再びノックが聞こえた。
恭介はどうぞと言うと扉が開く。
「恭介。気分はどう？」
入って来たのは美樹さやかだった。
さやかは始に気付くと会釈をする。
始はさやかの指に指輪が付けられているのに気付いた。
前に会ったときはあんなものしていただろうかと首を傾げる。
「恭介、プレゼントがあるの……」
さやかは嬉しそうに言うと屋上へ行こうと言った。
「いや、本当に助かったよ。ありがとうね！」
青年が言うと佐倉杏子は牛丼を口に含みながらいいよいいよと言った。

「それにしてもラッキーだったね。アタシが通りかからなかったアンタ死んでたよ？」

箸を青年に向けて杏子が言う。

「流石に魔女戦は初めてだったから勝手がわからなかったんだ……」

青年も牛丼を頬張っている。

「かめんらいだーって言うんだっけ？魔法少女以外に魔女と戦える奴がいるなんて驚きだよ」

杏子は牛丼のセットの豚汁の器から野菜を数片挟んでモグモグと口に運ぶ。

「うん。探し物をしてたらいきなり景色が変わってビックリしたよ。魔女の事は聞いてたけどまさかあんなデタラメな形をしてるとは思わなかったよ」

青年はその魔女の姿を思い出して身震いする。

「探し物、っていうのは？」

杏子は青年の先程の言葉から気になったワードを聞いてみた。

「見た目はＵＳＢのメモリみたいなんだけど……。多分、？Ｍ？って文字が書かれてると思うんだけど……知らないよね？」

杏子は豚汁の汁を一気に飲み干して知らないと答える。

「そっか……、放っておくと魔女みたいなのが出てくる可能性があるんだ……」

杏子はそっかと言ってその後は何も言わない。

やはり魔女を倒すことしか興味がないのかなと青年は溜め息をつく。

「じゃあさ。ワルプルギスの夜って知ってる？」

青年が本当に聞きたいことはこれだった。

「超弩級の魔女だろ？魔法少女なら大体知ってるよ。それがどうかしたか？」

牛丼の汁だくご飯をさらさらと口に流し込む杏子。

「1ヶ月後ぐらいにね。隣町の見滝原に現れるんだ。だから出来るだけ情報をね」

青年はお冷やを一気に飲み干す。

そして布巾で口を拭う。

「確かワルプルギスってのはランダムに現れるんだって聞いたことあるんだけど……」

要するに何故ワルプルギス出現を知ってるのかということらしい。

「まぁ、ちょっとね」

青年は笑って誤魔化すつもりらしい。

「まぁいいや。面白そうだからアタシも行ってみようかな。かめんらいだーも気になるし」

その言葉に青年は少し驚いた。

「え、あいつ洒落にならないぐらい強いから止めたほうが……」

まるで戦ったことがあるかのような口振りが気になった。

「ヤバかったら逃げるから大丈夫だよ。それに、アンタは戦うつもりだろ？」

青年は頷く。

「なら牛丼奢って貰ったお礼ってことでアタシも戦ってやるよ。でっかいグリーフシード落とすかもしれないし」

やっぱりグリーフシード目当てかと青年は苦笑する。

「じゃあ、アタシはすぐに向かうけどアンタはどうすんの？」

青年は少し考えてから口を開く。

「探し物見つけて仲間と合流したら向かうつもりだよ。探し物が見つからなくてもワルプルギスが出るまでには見滝原に行くよ」

杏子は頷きごちそうさまと青年に言った。

そのごちそうさまは本当に感謝を示しているような気持ちが伝わって来た。

ここまで気持ちが伝わってくると奢った青年も気持ちが良い。

「また、ワルプルギスを倒したら僕の仲間と一緒に美味しいもの食べようね」

杏子は笑う。

「それ、死亡フラグって奴じゃね？」

青年はいやいやまさかと笑った。

第8話「それ、死亡フラグって奴じゃね？」（後書き）

え～詩神の別の小説を読んでる人いないかもしれないけど、もし読んでる人は気付いてるかもしれないけど、謎の青年はあの人達だったりします。

一応、本格的に登場したら彼らだけ登場人物紹介みたいなのは書くので向こうを読まなくても大丈夫なようにはするつもりです。

詩神でした。

第9話「アンデット！？しかし……」（前書き）

仮面ライダー龍騎には……設定上、仮面ライダーブレイドという仮面ライダーがいる。

へぇ～、へぇ～、へぇ～、へぇ～、へぇ～、へぇ～。

確か手塚の友人がライダーになってたら的なコンセプトでガルドサンダーと契約した仮面ライダーブレイドってライダーがなんかでいたような……。

ガルドサンダーってどんなモンスターだっけか？

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第9話「アンデット！？しかし……」

巴マミが殺されかけたあの時、疾風のように現れたのは相川始だった。

栗原天音はその時の事を何度も思い出す。

襲いかかるお菓子の魔女。
蛇の様な巨体。

バイクで突進する相川始。

お菓子の魔女を薙ぎ倒し、立ち上がる私のヒーロー。

6年前、ブレイド、ギャレン、レンゲルの誰かが始だったら良かったなんてことを何度も考えた。

私のピンチに現れる始さん。

変身して助けてくれたら……。

あの時、その願いが叶ったのだった。

始さんが助けてくれた。
仮面ライダーになって私を助けてくれた。

あれからニヤニヤが止まらない。

こんな私、狂ってる？

そんなの知ってるよ。

始さんに依存している私。

お父さんがいなくなってから半年程経った頃に現れた不思議な人。

とってもカッコイイし、可愛いし、楽しいし。

始さんがいなくなったら私、きっと死にたくなってしまう。

あの時、嬉しかったけど、悲しかった。

始さんが魔女に殺されていたら私はきっとキュゥべぇと契約していた。

死者は蘇らないのなら、時間を戻して。

きっと私の願いは始さんとの出会いをやり直すことにすると思う。

そしたらもっと始さんに甘えられるから。

そしたらもっと始さんと話せるから。

自分勝手な願い事なのはわかっている。

だって本当に始さんを助けたいなら私との出会いではなく、始さんをこの土地に来なくすれば良いのだから。

すでにこの土地にいるのなら、この土地から遠ざければ良いのだから。

自分勝手で横暴だ。
始さんに依存しているからそんな願い事が出来るのだ。
結局、その場合は助けたいじゃなくて近くにいたいだけなのだ。
だから私はキュゥべぇと契約はしない。
魔法少女にはならないつもりだ。
巴マミが死のうが鹿目まどかが死のうが関係ない。
始さんはこんな私でも優しくしてくれますか？
「キュゥべぇが相川さん、人間じゃないって……」
鹿目まどかがハカランダに訪れ、相川始を呼び出した。
店内では天音に聞かれる可能性があるので、それはまどかの気遣いだった。
まどかはキュゥべぇのその言葉が信じられない。
始は答えない。
それはこの質問を肯定する意味だった。
「で、でもわたし、相川さんは悪い人じゃないって思ってます……。だってあの時……」
助けてくれたから。

なんて安っぽい言葉は聞きたくない。
悪人だって利用価値があれば善人を利用することだってある。
「本当に安心してたから……」
予想外の答えに始は困惑する。
「間に合って良かったって……」
確かにあの時、始は安心した。
天音の友人達が死なずに済んだと。
「最初にキュゥべぇに言われた時は恐いって思っちゃいました。でも、わたしの悲鳴を聞いて駆け付けてくれた時も、上条くんが生きてた時も、本当に心配してくれたんだなって思いました……。だから……、相川さんが人間じゃなくってもわたしは相川さんが好きです」
始は嬉しくなった。
自分の気持ちがこの少女に伝わっていたことに。
勿論、好きだと言われたのは恋愛感情ではないとわかっている。
要するに、人間として好きだという意味だと。
「俺は、確かに人間じゃない……。そのことを天音ちゃんは知らない」

始の言いたい事をまどかは察した。
勿論言い触らすつもりなどはない。
ただ確認しておきたかった。
キュゥべぇは危険だと言っていたが、彼の心は人間だと。
「わかりました。キュゥべぇにも天音さんに言わないように言っておきます……」
それで話しを終わろうとするまどかだったが、今度は始がまどかに質問する。
「さやかちゃんは、契約したのか？」
まどかが頷く。
「……すまない」
始は謝るが、まどかは首を横に振る。
「さやかちゃんは叶えたい願い事があったから……」
始は少し考えてから口を開いた。
「さやかちゃんに会わせてくれないか？戦い方なら教えられるかもしれない」
なってしまったものは仕方がない。

せめて戦う理由と戦い方を教えらないかと始は思った。
まどかは頷き、さやかに電話をした。
「ここが、魔女の結界？」
上城睦月は呟いた。
場所はデタラメな場所だとしか思えない。
メンヘル染みていて、何処と無く狂気をも孕んでいる場所。
「油断するな睦月。俺達が結界に入れたのは魔女が招き入れたからだ」
つまり魔女には気付かれている。
橘朔也はそう続けた。
彼らがこの場所にいるのは簡単だ。
魔女が結界を張るときにエネルギーが放出される。
そのエネルギーを感知出来る機械を作ってそのエネルギーを追ってきた所を魔女の結界に取り込まれた。
ただそれだけだった。
「でも橘さん。そのエネルギーの波長ってこの前説明してくれたものと違うんですよね？」

睦月はわざわざこの場所で聞かなくてもいいようなことを聞く。

しかし橘は答える。

「確かに違う波長だが、全く違うわけではない。特徴としては大きなエネルギーが放出された後、魔女の結界が出来ることが多い。つまり……」

何か大きなエネルギーが放出される瞬間、封印の石、モノリスが反応するわけだ。

モノリスが反応しない方のエネルギー放出を魔女の結界だと考えれば、反応する方のエネルギーは恐らく魔女の誕生した瞬間。

「なら魔女の誕生のエネルギーを追う端末を作れば……」

そうすれば犠牲が出る前に魔女を止められる。

しかし橘はそれは無理だと言う。

「そっちのエネルギーは大きすぎてとても端末で測定出来るレベルじゃない。ＢＯＡＲＤのコンピューターならなんとかなるかもしれないが……」

橘は端末に表示された波グラフを見る。

どうやらこの先に魔女がいるらしい。

「行くぞ睦月。相川からの報告によればライダーの力でも魔女は倒

せる。魔法少女でなくてもな」
その時だった。
突如魔女の結界が消えたのだった。
端末を見ると魔女の反応が消えている。
その代わりに別の反応が出ている。
魔女の誕生のエネルギーでもない。
この反応に橘は目を見開いた。
「魔法少女だ！近くにいる」
橘と睦月は辺りを見回す。
確かに人の気配はするが、この感覚に二人は覚えがある。
「アンデット！？しかし……」
違う。
「これは……」
睦月は橘以上にこの感覚に覚えがある。
まだ睦月がカテゴリＡの力を制御仕切れていない時、睦月をイラつかせたあの感覚。

人影が近付いてくる。
形は女性のような体のライン。
睦月は嫌な予感がする。
もし、睦月の思うアレであれば男のようなシルエットの筈だ。
しかしアレは違う。
もし本当にアレなら恐らく……。
「ワ、タシ、ハ……」
影が喋った。
シルエットには似つかわしくない声だった。
「ワタシ、ハ……、マホウ、ショ、ウジョ……、セイギノミカタ」
その影の周りに細長い何かが現れるんだ。
まるで魔法のようだ。
否、魔法なのだろう。
その影が細長い何かを掴みそれを二人に向ける。
それを見た橘はすぐに理解する。

「避けろ睦月！」

―バンッ！―

二人が伏せた瞬間に何かが二人の頭上を通った。

「橘さんっ！」

睦月はレンゲルバックルにカードを装填する。

それと同じく橘もカードをギャレンバックルに装填する。

そして腹部にバックルを当て装着する。

「「変身！」」

《ターンアップ》

《オープンアップ》

それぞれポーズをとりながらそれぞれゲートを潜る。

その瞬間、橘の姿は仮面ライダーギャレン。

睦月の姿は仮面ライダーレンゲルへと姿を変えて影に駆けていく。

影は2丁目のそれを持ち、レンゲルに向ける。

「気を付けろ！コイツは……」

ギャレンは援護射撃をしながら叫ぶ。

援護射撃でその影は怯みそれを落とす。

「解ってます！コイツはトライアル！」

それは形こそ違えれ、以前彼らを苦しめた。

人に作られし怪物、トライアルシリーズに酷似、否、トライアルシリーズの怪物だった。

第9話「アンデット！？しかし……」（後書き）

まさかのトライアル登場！

そのコピー元は予想通りマスケット銃のあの人です。

あの人がコピーされてるってことは……。

詩神でした。

第１０話「橘さんの仇だぁぁッ！」（前書き）

ネットで調べて龍騎世界のブレイドを見ました。

どうやらオリジナルフィギュアみたいですね。

何か見た目がライアのバイザーと顔をちょこっと変えた感じでした。

あと小説でギャレンキングフォームとかレンゲルジャックフォームがあるみたいですね。

天音ちゃんがあんまり出てこないけど魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第１０話「橘さんの仇だぁぁッ！」

そのトライアル。
仮にトライアルＭ（魔法少女）と呼ぶことにする。
トライアルＭの戦い方は華麗だった。
近接になればマスケット銃の柄での打撃。
中距離から遠距離になれば華麗な銃撃。
中距離にいるはずのギャレンにまで攻撃を仕掛けてくる始末だった。
勿論、それを易々と食らうギャレンではない。

「なんでトライアルが……！」

レンゲルは呟いた。
が、今はそんなことを言っている場合ではない。
相手を見れば解るように相手はこちらを敵として認識している。
レンゲルは前衛でダメージを与える役。
ギャレンは後衛でレンゲルのダメージの上乗せと危ない攻撃を潰す役だった。
二人は優勢でもなければ劣勢でもない。
もし、この敵が本当にトライアルだとしたら少々厄介だ。

アンデットをベースにしている為、死ににくい。
だが、決して死なないわけではない。
相手の規格を超える圧倒的ダメージを食らわせれば倒せる。

「睦月！とにかくダメージを与えろ！」
それは決して無謀な戦術ではなかった。
あの戦い方をギャレンは知っている。
勿論直接的に知っているわけではない。
ただあの戦い方が理解出来るのだ。
あの戦い方は恐怖心に囚われた者の戦い方だ。
確かに恐怖心がなくなれば多少は強くなる。
だからこそ戦いに恐怖心は必要だ。
だが恐怖心に囚われた者の戦い方は消極的になる。
恐怖心を持った戦い方は敵を倒す戦い方ではなく、自分を守る戦い。
それは決して悪いことではない。
だがチャンスを逃す。

本当に二人を倒すだけならばマスケット銃の柄で殴るのではなく、零距離射撃でレンゲルを倒せば良い。

ただその方法でもレンゲルなら対処出来ることをギャレンは知っている。

レンゲルの杖、レンゲルラウザーの打撃がトライアルMに大きな隙を作った。

「睦月！今だっ……！？」

ギャレンは気付かなかった。

避けた銃弾が作った弾痕。

そこから黄色リボンが出ていたことに。

それがギャレンの身体に巻き付いて拘束しようとしていたことに。

「橘さん！」

レンゲルがギャレンの異変に気付いた時、トライアルMは大きく距離を取った。

「――くっ！」

身動きの取れないギャレンに駆け寄るレンゲル。

レンゲルはレンゲルラウザーで拘束しているリボンを破壊しようとするが、拘束は解けない。

「睦月！俺の事は良いから逃げろ！」

ギャレンは解っていた。

この後の敵の行動が。

相手を拘束、距離を取ったとなれば考えられることは二つ。

一つは逃げること。

通常の心理ならば2対1で埒があかない時、または劣勢の時に有効な手段だ。

もう一つは相手を終わらせること。

余程の切札を持っている場合、または恐怖心に囚われ、周りが見えていない時に取る手段。

今の状況から察するにトライアルMは撤退する気はない。

となると切札があるか敵を倒すという強迫観念に苛まれているのどちらかだ。

「……ティロ」

トライアルMは巨大な大砲を召喚する。

それは辛うじて銃の形はしているが、大きさが大砲に違い。

否、それ以上かもしれない。

「睦月！奴が撃った後……」
ギャレンは敵を倒す秘策をレンゲルに託す。
「でもそれじゃ……！」
拘束されたギャレンに大砲の砲身が向けられる。
「頼む睦月！」
レンゲルは頷きトライアルＭに駆ける。
「……フィナーレ！」
大きすぎる衝撃がギャレンの全身を襲った。
《フュージョンＪ》
《アブソーブＱ》
トライアルＭの放ったティロフィナーレの爆炎の中から無機質な電子音が聞こえた。
その爆炎の中からレンゲルが飛び出してくる。
否、先程までのレンゲルではない。
先程までは緑と金色の比率が緑の方が多かったのだが今のレンゲル

は金色の比率の方が多い。
肩には象の牙の装飾が成されている。
それは6年前のバトルファイトでは表舞台に出なかったレンゲルの強化フォーム。
仮面ライダーレンゲル・ジャックフォームだった。
レンゲルJは駆けながら強化型レンゲルラウザーに二枚のカードをラウズする。
《バイト》
《ブリザード》
レンゲルの身体にコブラと白熊の力が宿る。
《ブリザードクラッシュ》
「橘さんの仇だあぁぁッ！」
レンゲルJが高くジャンプする。
そして頂点で冷却を纏い、トライアルMに噴射される。
みるみる内にトライアルMの足元が氷付き、身動きが取れなくなる。
トライアルMはもがいているが、動けない。

あとはレンゲルＪの攻撃が届くのを待つことしか出来ない。

「はあぁぁっ！」

レンゲルＪの二段キックがトライアルＭに届いた。

「ワタシハ、セイギノマッ！！」

そしてトライアルＭの身体は粉々に砕かれた。

レンゲルは変身を解き倒れている橘に近寄る。

橘は頭から血を流していて、口元にも血が滲んでいる。

「……橘さん」

睦月が橘を抱き起こす。

橘はゆっくりと目を開ける。

「……勝手に殺すな」

睦月は安堵して立ち上がろうとする橘に肩を貸す。

「もうこれは魔法少女だけの問題じゃない……。先日のハッキングで抜かれたのはシュルトケスナー藻とトライアルシリーズのデータだ……。睦月、見滝原に向かうぞ……」

睦月は頷いた。

魔女が誕生する時のエネルギーや結界が発生した時のエネルギーで

封印の石が反応するのは偶然かもしれない。

魔法少女や魔女とライダーやアンデットの事柄は全くの別物だということは6年前の戦いに魔法少女が関わってこなかったことから推測出来る。

もし関係があるなら始、ジョーカーやヒューマンアンデットが何か言う筈だ。

そしてトライアルが関わっているとするともう魔法少女だけの問題ではない。

何者かがトライアルのデータを使ってトライアルを作ってしまったのだ。

このまま放っておけば悪用され続け、最悪合成アンデットまで造り出してしまうかもしれない。

橘と睦月は始に連絡してから見滝原に向かった。

第１０話「橘さんの仇だぁぁッ！」（後書き）

改めて思ったのはやっぱりタイトル詐欺タグ付けといて良かったと思いました。

都合上、まどマギサイドの描写を減らしている感じなのでタイトルを《仮面ライダー剣☆マギカ～もう一つの願い～》とかそんな感じのタイトルにした方が良いんですけどね。

ところで橘さんの不死身っぷりが恐ろしい件について。

アンデットと融合してるから剣崎ほどでもないけどアンデット化しているってことで！

詩神でした。

第１１話「何でこんな事に……」（前書き）

マミさんがあんな事になったのは私の責任だ……。
だが私は謝らない。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第11話「何でこんな事に……」

とある路地裏で魔女の使い魔を追い詰めた美樹さやかと仮面ライダーブレイド、相川始はジリジリと使い魔と距離を詰めていく。

ブレイドはさやかを見て頷く。

さやかの戦い方は未熟で危なっかしい。

いくら回復の祈りで魔法少女になったとしても回復魔法に頼ってはいけないと始は教えた。

それに慢心してしまえばそれ以上の成長はなくなってしまう。

だから戦闘術で最初に教えたのは、危なくなったらすぐに逃げるということだ。

例え死なない身体になったとしてもだ。

それはアンデットである始が一番良く知っている。

「じゃ、魔法少女さやかちゃんが決めちゃいますよ」

次に教えたのは少しの遊び心。

勿論、油断しろという意味ではない。

要するに心に余裕を持ち冷静さを持てということだ。

剣崎との最後の戦いの時、始はただの獣だった。

剣崎を本気にさせ、封印されるつもりだった。

あの時、少しでも冷静さを失わなければ今とは違う結果になっていたかもしれない。

ただ、剣崎の選択を無駄にするつもりもない。

話しは戻るが、さやかの剣が使い魔を切り裂いた。

例え使い魔でも放っておけば魔女になるのならば倒すしかない。

「いやぁ～さやかちゃん大活躍ですよ。これも始さんのお陰ですかね～」

ブレイドは変身を解いた。

それが合図だったのか、まどかが駆け寄ってくる。

「さやかちゃんすごいよ」

そんなことを言っているが額に滲んだ汗を見ればそれがさやかを安心させる為に言ったことは明白だった。

「なかなかやるね。今の戦い方と戦う理由を忘れなければきっと死にはしないよ」

さやかは最後に言われた事を思い出す。

それは何の為に闘うか。

さやかは答えた。

みんなを助けたいからだと。

始はそれでは駄目だと言った。

みんなを助けたいならば、それなりの見返りを貰わなければいけない。

始は剣崎一真の事を話した。

どんなに辛い闘いの中で彼が守りたかったもの。

彼は仮面ライダーこそが自分の仕事であると言っていた。

自分の助けられなかった人達の分まで人を助けたい。

それが俺の仕事だと。

要するに気の持ちようだ。

剣崎は仕事と友の為に。

橘は失った恋人と信じた友の為に。

睦月は自分に打ち勝ち大切な人を守る為に。

それぞれ理由は違うが最後は自分の為に繋がった。

さやかの戦う理由はみんなを助けたいからではない。
みんなを助ければその分だけ自分と友人達が変わらぬ日常を送れる。
それを忘れなければ自然とどんなに辛い魔法少女も続けていける。

「わかってます始さん。ただみんなの為に闘うんじゃなくて、みんなが幸せでいてくれればあたし、絶対に絶望なんてしません」
始は頷いた。

「甘いわね美樹さん……」
誰かが路地裏の影から姿を表す。
始の、否、そこにいる全員が聞き覚えがある声だった。

「そんなこと言ってたらいつか死ぬわよ？私みたいにね……」
その影に夕闇の太陽が当たり、その顔がハッキリと見えた。
しかしその姿は以前のマミの姿ではない。
以前は黄色を基準としたドレスだったが、今は黒を基準とした禍々しいドレスを着ている。
黄色い輝きを放っていたソウルジェムは黒く濁り嫌な輝きを放っている。

「マミさん！」

さやかは驚いて唖然とする。

まどかも始も同じような反応だった。

「美樹さん、魔法少女になってしまったのね……。願い事は？好きな人の為？」

マミの瞳が金色に輝く。

「マミさんその姿は……？それにこの感覚……、魔女？」

さやかは答えずに疑問に思った事を口に出してしまう。

「そうよ？」

マミの表情が歪む。

そしてマミを中心に禍々しい空間が広がっていく。

それは明らかに三人の知っている感覚だった。

魔女の結界。

「魔法少女って絶望すると魔女になるのよ？知らなかったでしょう？」

なんということだろうか。

倒すべき敵が今の自分達の成れの果てだということにさやかもまどか始も驚愕した。

「う、嘘だッ！だって魔法少女は希望を振り撒くってマミさんがッ！」

明らかにさやかは動揺している。

まどかも始も言葉すら出ない。

「なら魔法少女が絶望を撒き散らしたら魔女ってことにならない？」

「違うッ！だってマミはあんなバケモノじゃないじゃない！」

さやかの言うことは尤もだ。

本当に魔法少女が魔女に成るのならば人間の姿を保っていること事態がおかしいのではないか。

その疑問にマミは淡々とした口調で答える。

「それはきっとアレのせいね。魔女化のエネルギーより私の闘争本能の方が勝っているからかしら？」

マミの言うアレというのをさやかは知らない。

だが何らかの原因で完全な魔女になっていないのは理解出来た。

「でもね、私は完全に絶望したわけではないのよ？ソウルジェムが魔女を産むのなら、殺すしかないじゃない？貴女も私も……」

つまりは魔女に成る前に魔法少女を殺すつもりだという心意をさやかはその言葉から読み取った。
否、読み取るまでもなくマミの殺気を感じれば理解してしまう。

「何でこんな事に……」

さやかは泣きそうな顔でマミを見つめた。

「さぁ始めましょ？あ、その前に……」

さやかに加勢しようとしたのか、ブレイバックルにカードを装填しようとした始にマミがマスケット銃を向けた。

そして躊躇わず発砲。

それに始は反応出来なかった。

ただし銃弾が当たったのは始の持つブレイバックルだった。

ブレイバックルは弾かれまどかの足元に落ちる。

そしてまどかと始の間に黄色いリボンの結界が張られる。

結界の外にはまどか一人が残る形になってしまった。

「これでアナタは変身出来ない……」

そう言い終えたマミは大量のマスケット銃を空中に固定されたように召喚する。

その量は以前見た数の何倍もある。
その銃口が全てさやかに向けられている。
「やめてマミさん！」
マミは止めるつもりなどはなかった。
「サヨナラ美樹さん……」
始は駆けた。
あの銃口から弾が発射されたらまず助からない。
だがあの銃弾全てを受けても死なない怪物を始は知っている。
さやかの前に立つだけで良い。
だがさやかとの距離が離れすぎていて間に合わないのは明白。
ただし間に合う方法はある。
ただ元の姿に戻れば良い。
だが躊躇う。
「間に合えェェ！」
始のその叫びは獣の咆哮にも似ていた。

「大丈夫よ」

凛とした声が聞こえた。

駄目だと思ったが大丈夫だった。

さやかの姿が消えていた。

まるで最初から存在していなかったかのように。

さやかが立っていた地面は蜂の巣になっていた。

さやかを探すとすぐに見つかった。

マミの後ろで座り込んでいる。

「危なかったわね」

マミの前に一人の少女がいた。

銀の盾を携えた灰色の魔法少女。

暁美ほむらだった。

始はこの感覚を知っていた。

時間停止。

以前、スペードのカテゴリKと戦った時にその感覚を味わった。

「ありゃ？お前は……」

さやかの背後から声がした。

そこには始の見たことない少女がいた。

銀と赤の槍を携え、赤い魔法少女服、ポニーテールで口にはチョコレートのお菓子をくわえている。

「佐倉杏子……？」

ほむらは呟く身構える。

「……どこかで会ったか？」

杏子は怪訝な顔をする。

「何かよくわからねーけど、マミはどうしちまったんだい？これじゃあまるで……魔女？」

杏子は呟いた。

「……とても優勢とは言えないわね」

マミは身を翻した。

確かにその判断は正しかっただろう。

マミからしてみれば始は戦えない。

だがそれを差し引いてもさやか、ほむら、杏子の三人が今のマミに疑問を抱いている。

拘束術もタネが割れていてはうかうかと使ってはいられない。
もしかしたらさやかぐらいは倒せるかもしれないが、リスクが大きすぎる。
「また会いましょう。アナタ達が魔法少女でいるかぎりね……」
マミは大きく跳躍して姿を消した。
いつの間にか結界も消えている。
「さやかちゃん！」
まどかがさやかに駆け寄って無事を確認する。
杏子は状況が掴めていない。
「おいお前ら！誰でも良いから説明しろよ！何でマミがあんな状態なんだよ？」
ほむらは溜め息をついて杏子に状況を１から説明しはじめた。
途中から始やまどかも加わる。
さやかは泣きそうな顔で何かを呟いていた。
【ＢＯＡＲＤ研究所後】
「まさか絶望しても魔女化しないとはね。訳がわからないよ。このシュルトケスナー藻の実験は失敗なのかな？」

ＢＯＡＲＤの研究所後、白い生物、キュゥべぇが呟く。

「まぁ今度はこのトライアルＭＳで試してみようかな。この前のトライアルＭＭはまだ試作品だしね」

キュゥべぇはキーボードを叩きながら言う。

「もう少しだけマミには働いてもらわないとな。はぁ、これから忙しくなりそうだ」

表情を変えずにただ一人で言い続けている。

「まぁいざとなれば僕も切札を使わなければいけないしね」

キュゥべぇがキーボードの乗った台からピョコンと降りる。

そして何処かに行ってしまった。

第11話「何でこんな事に……」（後書き）

キュゥべぇが本編並に外道過ぎるｗｗｗ

ここまで酷くするつもりはなかったけど、もうキュゥべぇには本当の悪魔になってもらわなけりゃ困るな……。

そして杏子の登場シーンがアッサリし過ぎてる気がするけどまぁいいや……。

そして主人公なのに天音ちゃんの空気っぷりが……

これじゃタイトルを？魔法少女あまね☆マギカ空気？じゃねぇかｗｗ

第１２話「これ食っても言いかな？」（前書き）

今回はギャグ回みたいな感じです。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第12話「これ食っても言いかな？」

相川始、鹿目まどか、美樹さやか、暁美ほむら、佐倉杏子はとあるマンションにいた。

今回の事件の調査に当たって見滝原の拠点とする物件が必要だったので橘朔也が借りたマンションだった。

「恐らくトライアルMの元となったのは巴マミとい少女だろう」

一通りの話しを聞いた橘は言った。

相川始もその意見には同意した。

魔法少女勢はトライアルシリーズのことは知らなかったのだが、始、橘、睦月が1から説明した。

「それとさやかちゃん」

橘はさやかを見る。

「そのキバットというのに会わせてもらえないか？」

さやかは頷いた。

「あ、でも明日で良いですか？今は恭介の話し相手になってるんで」

橘は構わないと言ってキッチンへ向かう。

どうやら失敗したパスタのおかわりを持ってくるつもりらしい。

先程から杏子が美味そうに食べているのを見て橘は少しだけ機嫌が良いらしい。

「杏子ちゃん俺も聞きたいことが」

今度は始が杏子を見る。

パスタの最後の一口をモグモグと口に含みながら頷く。

「君が助けたライダーってどんな奴だった？派手なジャンパーを着ていたりしなかった？」

始に接触してきた青年は派手なスカジャンで目付きが悪かった。

やはりその青年の事は気になっている。

杏子が助けたライダー。

杏子が語るにはそのライダーは余りにも弱かったらしい。

確かに多種多様な戦術は取れるのだが、攻撃が全くと言って良いほど効いていなかったらしい。

「いや、どっちかっていうと地味な感じだったよ。目付きは……フツーであんまり目立たないような……。なんか《カメンライド・ウェーイ！》とか言って変身したりね」

となると仮面ライダーウェーイかと始は呟く。

そんなライダーは知らない。

むしろ訳が解らない。

「むしろウェーイ！ってなんだよ……道【ｗａｙ】かよ……」

始は呟いている。

杏子は橘の持ってきたパスタを見る。

「これ食っても良いかな！？」

橘は頷く。

杏子は美味しそうに食べ始めた。

「ライダーの三人に聞きたいことがあるわ」

今まで沈黙を守っていた暁美ほむらが突然そんなことを言い出した。

三人はほむらを見る。

「赤い目の黒い仮面ライダー、緑色の不死身の怪物をアナタ達は知っているかしら？」

橘と睦月は始を見る。

勿論知っている。

赤い目の黒いライダーは恐らくカリス。

相川始だ。
緑色の不死身の怪物は５３番目のアンデット、ジョーカー。
それも相川始だ。
「黒い仮面ライダーは世界を救う者」
ほむらは無表情でそう言った。
「不死身の怪物は全てを壊す者」
始は何も言えない。
どちらも自分だと。
「知らないな。しかし君は何故それを知っている？」
橘がそう言って始に目配せをする。
どうやらこの情報は魔法少女側に与えないつもりらしい。
「そう、なら良いわ」
立ち上がろうとするほむらだったが、始がそれを制す。
「ちょっと待って。君に聞きたいことが……」
ほむらが始を見る。

「君の目的と願い事はなんだ？」
「アナタ達には関係ないわ」
ほむらの表情が強ばる。
「確か魔法少女の能力って願い事に左右される筈だよね？」
始はさやかを見る。
本当はキュゥべぇに聞きたい所なのだが、今は不在だ。
さやかは頷く。
「あたしは恭介の腕を治したから……」
要するに回復能力。
その回復魔法でキバットバットの翼の怪我を治したらしい。
「それがどうしたの？」
ほむらが始を睨み付ける。
「君の魔法少女の能力は多分……」
始がその答えを言おうとする。
「あ！もしかしたら間違ってるかも！」
突然さやかがそんなことを叫ぶ。

「いやぁ回復ぐらいなら魔法少女なら誰でも出来そうな気がしてきたわ～」

さやかが始から目線を反らす。

「だから多分魔法少女の能力と願い事はカンケーないかも」

先程までと言っていることが違う。

明らかに能力をバラされたくないからそんなことを言っているように聞こえる。

尤もさやかがほむらの能力を知っているかどうかは別問題だ。

「いや、何でもない」

始は立ち上がる。

どうやら帰るつもりらしい。

本来ならばさやかの修行や魔女討伐などしている暇などない。

本来なら、栗原天音の傍にいたい。

天音にも魔法少女としての素質があるのならばいつ契約してもおかしくはない。

「始。これを持っていけ」

橘は始から預かった携帯にアンデットサーチャーを魔女用に改良したアプリケーションをダウンロードしていた。

ただし結界には入れない。

結界に入るのならば魔女側から招かれるしかない。

「俺はこれから巴マミを探す。このまま放っておくことは出来ない」

橘は感じていた。

何となく自分とマミが似ていると。

恐怖心に囚われた人間の末路を知っている。

間違いなく大切な物を失う。

それが自分の命であれ、大切な人であれ、最後には絶望しか残らない。

「ねぇほむらちゃん……」

今まで一言を口を聞かなかったまどかが口を開いた。

しかしほむらは一瞬だけ辛そうな顔をして俯いた。

「まどか止めなって。コイツには何を聞いても無駄じゃない」

さやかが横から口を挟む。

明らかに不自然だった。

まるでまどかとほむらを近付けたくないようだ。

「え、そんなの聞いてみないとわからないよ。だってほむらちゃんと始さん……何だか似てる気がするの」

ほむらが少し驚いた。

始は目を丸くしている。

「だってほむらちゃんも始さんもとても悲しい目をしてる……」

「似てないわよ。私は悲しくなんかない。彼はどうかは知らないけど……」

ほむらが更に俯く。

「私はそろそろ失礼するわ。美樹さやか。気を付けなさい」

そう言ってほむらは靴を履いて玄関の扉から出ていった。

第１２話「これ食っても言いかな？」（後書き）

杏子が助けた謎の青年は一体何者なんでしょうね？

しかも弱いとか……。

ギャグで仮面ライダーウェーイでも書こうかなｗｗｗ

第１３話「だから死んで！」（前書き）

橘さんってヘタレな部分もあるけど、自分より上位の相手だとメチャクチャカッコ良くなるな……。

ブレイド屈指の名シーンはやっぱり【この距離ならバリアは張れないな！】のシーンだと思うんだぜ。

異論は認める。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第１３話「だから死んで！」

橘朔也は旧ＢＯＡＲＤの跡地にいた。

アンデットサーチャーを応用したウィッチサーチャーを持って、先日のトライアルＭの反応に酷似した魔法少女の反応を追っていた。

恐らくは巴マミ。

反応は安定しているが、魔法少女の物とは違う。

どちらかと言えば魔女の反応に近い。

橘はフッと懐かしさを感じた。

この場所は彼が以前、烏丸所長を監禁した場所だった。

己の恐怖心に負け、人が信じられなくなっていた過去。

そんな時、自分の心配をしてくれた女性。

だが必要と伸ばされた手を振り払ってしまった。

孤独に落ちた先に儚い想いは散ってしまった。

その時、思い知った。

「小夜子……」

その名を呟く。
今思い返してももう遅い。
巴マミにはそんな思いはして欲しくない。
否、させない。

誰かの気配がした。
橘はその誰かは巴マミだと確信した。
「出てくるんだ。そこにいるのはわかってる」
散乱した機材の影から少女が姿を現した。
ブロンドの髪に見滝原の制服。
まどかやさやかに聞いていた特徴と一致する。
「誰？」
生気ない声て言う。
その声はトライアルMと同じ声だった。
「君がマミちゃんか。俺は橘朔也。始と同じ仮面ライダーだ」

これは隠す必要はない。
一応、彼女も仮面ライダーについては知っているらしく、問題はない。
「フフ……じゃあ、アナタもアンデット？」
橘はビクンと震える。
まさか始がアンデットだと知っているとは思わなかった。
「アンデットの事を誰から聞いた？」
マミは妖艶な笑みを浮かべる。
心なしか瞳が黄色く輝いた気がした。
「キュゥべぇが教えてくれたの。それと、私を戦える様にしてくれたの……」
その言葉で橘はハッとしてマミが来た方へ駆け出す。
そして研究所の奥に在ったのは橘の予想通りの物だった。
「シュルトケスナー藻……。何故これが……？」
言ってから橘の中で何かが繋がる。
自分のパソコンがハッキングされた事が。
そしてハッキングしたのは恐らくキュゥべぇ。

橘はキュゥべぇの事は聞いていた。
妙な胡散臭さを感じていた橘に違和感はなかった。
キュゥべぇには裏がある。
巴マミの話しからすると魔法少女はいずれ魔女になる。
それを伝えなかったと言うことは魔法少女の魔女化自体が目的と言うことなのか？
そこまで考えてから橘の中で全てが繋がった。
魔女が誕生する時に発生するエネルギー。
それが目的なのではないか？
カツンと足音がした。
「マミちゃんは知っているのか？その……キュゥべぇの目的を……」
振り向かなくても巴マミだと分かる。
「何となく解っちゃったのよ……」
「何故キュゥべぇに何も言わない？」
橘の質問にマミは顔を伏せた。
「言ったわよ……。そしたら何て言ったと思う……？」

『だって聞かれなかったからさ。それに真相を言うと君達はいつも同じ反応をする……。訳が解らないよ』

その時だろう。
マミが絶望したのは。

だから魔法少女と魔女を殺すことを思い付いた。
普通ならその時点で魔女化してもおかしくはない。

だがシュルトケスナー藻の副作用だろうか。
絶望しても魔女にはならない。

と言うことはシュルトケスナー藻の効果が切れたらどうなるのだろう？

切れた瞬間に魔女化するのだろうか？

だとしたらこのシュルトケスナー藻はキュゥべぇにとっては誤算だったのだろう。

恐らくキュゥべぇは実験をしていたのだ。

「カッとなってキュゥべぇを殺したわ……。でも」

無駄だったらしい。

「殺しても殺しても殺しても殺しても殺しても殺しても殺しても殺しても殺しても殺しても殺しても殺しても殺しきらないの

……。何体も出てくるの……」

まるでアンデットだ。

殺せない怪物。

意識を共有した無限の怪物。

橘はそんなことを考えた。

「だから考えたのよ……」

マミが呟く。

「私が魔女になる前に出来るだけ魔女を殺す。私が魔女になる前に魔法少女を殺す……」

そして最後は自分が死ねば多くの?人間?の命は助かると言うことか。

「それと、仮面ライダーもアンデットと融合して変身するんでしょ?だったら、いずれアンデットになるってことじゃない?アンデットも、仮面ライダーも私の敵よ……」

マミの瞳に妖しい光が宿る。

その光を橘は知っている。

それは闘争本能だ。

「何か方法がある筈だ!魔法少女達を救う方法が……」

その言葉が聞こえていないようだ。
マミがソウルジェムを出す。
その濁った宝石はマミの心を現している。
「だから死んで！」
マミの身体が黒く輝き、黒いドレスの魔法少女になった。
そしてマミを中心にカラフルな空間が広がっていく。
鳥籠をイメージするような空間だった。
橘は少し迷ってからギャレンバックルにカードを装填する。
更にバックルを腰に装着する。
「変身ッ！」
《ターンアップ！》
レバーを引いて蒼いゲートを通り抜けた橘の姿はノコギリクワガタとダイヤの意匠が刻まれた騎士、仮面ライダーギャレンへと姿を変えた。
戦いはマミが一方的な展開を見せた。
マミがマスケット銃を召喚し発砲。
ギャレンはただひたすら避ける事しか出来なかった。

否、しなかった。

「避けてるだけじゃ勝てませんよ？」

言いながらマミが高く跳躍する。
そして更にマスケット銃を召喚。
今度は空中に固定するように設置する。

トライアルＭの使わなかった戦術だった。

着地したマミは更にマスケット銃を召喚し、握ってギャレンに向けて発砲。

それをギャレンは避け、在らぬ方向にギャレンラウザーで発砲する。

「どこを狙っているの？狙うなら私を狙いなさい」

その言葉が聞こえないのか、ギャレンは更に在らぬ方向への発砲を続ける。

再びマミが跳躍する。
そして同じようにマスケット銃を空中に設置。

隙を突いて在らぬ方向からの攻撃をするつもりらしい。

ならばそれさえ警戒すればなんら問題はない。

「君の戦術は見えている！君に勝ち目はない！」

ギャレンは叫んだ。

マミを挑発し、ギャレンの戦略に嵌める為だった。

「なら、試してみましょう！」

マミが両手を広げる。

ギャレンはそれを狙っていたようだ。

ギャレンは始から借りたカードをラウズする。

《プラント》

ラウザーから電子音が聞こえた。

マミの動作は止まらない。

設置したマスケット銃に命令するように両手を閉じようとする。

それと同時にマスケット銃の弾痕から黄色いリボンを出そうと念じる。

が、ギャレンラウザーで在らぬ方向に撃った弾痕から植物の蔦が生えてリボンがギャレンを拘束しようとするのを邪魔し、更にマミを拘束する。

ギャレンが使ったカードはハートのカテゴリー7。

【バイオプラント】のカードだった。

カリスが使用すればカリスラウザーから蔦が伸び相手を拘束する効

果なのだが、ギャレンが使用すると弾痕から蔦を生やして相手を拘束する効果に変わる。

マミはもがくがそれは無駄だった。

「君の負けだ。マミちゃん」

ギャレンは言い放ちマミに近付く。

そしてマミの頭部に着いたソウルジェムを取る。

「だ、誰？私の結界に入ってくる……？そんなあり得ない……」

ソウルジェムを取られた事など目に入っていないようだ。

どうやら誰かが結界の中に侵入してきたらしい。

「魔法少女か」

ギャレンはウィッチサーチャーを確認する。

反応は結界のみ。

魔法少女ではなかった。

では誰が入って来たのだろうか。

「解らない……誰……」

マミはただ呟いた。

ギャレンは警戒態勢に入る。
魔法少女やトライアルの反応はない。
ライダーは結界に入って来れない。
ならば誰だろうか。
カツンカツンと足音が聞こえる。
ギャレンは人差し指を口元に当てて静かにしろのジェスチャーをするがマミは聞き入れない。
ただ恐怖している。
正体不明のアンノウンの存在に。
足音は扉の前で止まる。
しかし扉は開かない。
バイオプラントで蔦が絡み付いていて開けられない。
ガチャガチャとドアノブを捻る音がするがやはり駄目だったらしい。
《エクスプロージョン！》
聞き慣れない電子音がする。
《エクスプロージョン・マキシマムドライブ！》

それが聞こえた瞬間、物凄い爆炎と共に扉が消し飛んだ。

第13話「だから死んで！」（後書き）

謎のメモリ使い登場（？）

ガイアメモリって何でもアリだから上手く使えば物語的にも便利過ぎるな。

ちなみに詩神はブレイドメモリだけは持ってたりします。

第１４話「何でもないよ」（前書き）

そういや最近、オーズ観てねぇ……。

どうなってるかわからないから甥っ子に状況を聞いてる感じです。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第１４話「何でもないよ」

美樹さやかは自室のベッドの上で寝転んだ。

妙な気分だった。

最初は気に食わなかった転校生の暁美ほむら。

さやか自身は今もその気持ちは変わらないと思う。

先程、橘朔也のマンションで何故、ほむらを庇ったのかが、さやか自身不思議でならなかった。

さやかはほむらが嫌いだ。

だが友人の鹿目まどかを気にかけているのは理解出来る。

自分だってまどかが大切だ。

大切な親友だ。

親友を危険な目に会わせたくない。

ほむらもそうだと思った。

確かまどかはほむらと夢の中で会った事があるとも言っていた。

案外、本当に前世での因果でもあったのかと思う。

馬鹿らしい。

前世なんて……。

違う。

魔法少女なんてものが存在するのならば前世、来世なんてものも存在するのかもしれない。

話しが脱線している。

確かにほむらは嫌いだが、まどかを危険な目に会わせたくないのならば、きっと友達になれる。

彼女の本当の目的が解れば力になってやれるかもしれない。

そういえばとさやかは思い出す。

魔法少女の能力は願い事によって変わる。

それは事実だ。

現にさやかの能力は治癒魔法。

先程、相川始には嘘を言ってしまった。

やはりほむらを庇わずに能力を聞いておけば良かったかもしれない。

そこまで考えてさやかは思い出す。

マミにトドメを刺される瞬間、自分の位置はマミの後ろに移動していた。

その事から彼女の能力を推測出来るかもしれないのだが、さやか自身あまり頭が良い方だとは言えない。

ＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉ

さやかの携帯が鳴った。

手探りで携帯を掴んでディスプレイを見る。

鹿目まどかからの着信だ。

通話ボタンを押して受話器を耳に当てる。

『あ、もしもしさやかちゃん？』

まどかの声は何処と無く慌てているようだった。

「どうしたのよこんな時間に」

さやかは部屋の壁掛け時計を見る。

時間は２２時過ぎ。

普段ならばこんな時間に掛けてくることはない。

『あのね、マミさんが見つかったって。さっき橘さんからメールが来たの。それでさやかちゃんにも連絡してって』

さやかはもう一度時計を見る。

「マミさん、大丈夫だって。怪我もないし、魔女化の心配もないって……」

その言葉をさやかは信じられなかった。

あのソウルジェムの濁りは尋常ではなかった。

マミから魔女の気配もあった。

「一体どうやって……」

解らない。

『仮面ライダーの力を使ってソウルジェムの汚れを消したって……。詳しい事は話せないけど、とにかく大丈夫って言ってたよ』

それが本当なら安心出来る。

実際、魔法少女の成れの果てが魔女だと聞いた時にはショックを受けた。

その言葉だけで魔女にならなかっただけで奇跡だと言っても良い。

さやかは自分のソウルジェムを見る。

かなり黒くなってはいるが、下手に魔法を使わなければ問題ない。

『本当はすぐにでも行きたいんだけど……。橘さんが明日の方が良いって』

そういう事なら仕方がない。

さやかだってすぐに行きたい。

橘朔也や上城睦月は一応大人なのだ。

普通の大人が言ったのならばさやかは聞かなかっただろう。

しかし橘朔也、上城睦月、相川始はこの様な状況を何度も潜り抜けている。

それならばそれに従った方が良いに決まっている。

「そうだね。明日、橘さんにキバットちゃんを会わせる約束もしてるしね」

キバットの名を言った瞬間、受話器越しにまどかの深呼吸が聞こえた。

「どうしたの？」

『う、うんッ！？何でもないよ』

この慌てっぷりは何かを隠しているような気がした。

「そ、そう。なら良いや。とにかく明日、学校が終わったらね」

『うん。明日ね。おやすみ……』

さやかもおやすみをいって電話を切る。

気になる事は沢山ある。

暁美ほむらの事。

キバットの事。

そしてキュゥべぇの目的。

魔法少女が魔女になる事を知っていて契約するのならばその目的が不明だ。

あるいは知らないのかもしれない。

否、そんな筈はない。

キュゥべぇは全てを知っている。

考えている内にさやかは眠くなってしまった。

今日はいろいろな事があった。

疲れているのだろう。

さやかはゆっくりと目を閉じてその安らぎに身を任せた。

第１４話「何でもないよ」（後書き）

今回はさやかから見たほむらがどんな感じかみたいな話しでした。

それとマミさん見つかって良かったわ。

それと気付いてる方もいると思いますが、マギカ勢は必要な箇所以外は書かないつもりです。

つまり原作と変わらない箇所はそのまんま過ぎたって感じです。

１話の時点でマミさんがさやかとまどかとは既に出会っていて、その出会い方は原作と同じ感じなので。

第１５話「もう誰にも頼れない」（前書き）

今回短いです。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第１５話「もう誰にも頼れない」

「なんなのここの魔女は……」

暁美ほむらは困惑していた。

自分の知らない魔女が出現した。

しかもその場所はほむらも知っている場所だった。

「志筑さんの家に魔女……？」

ほむらは魔女の結界の中を進んでいく。

志筑仁美の家に魔女が出現したのならば結界に閉じ込められたのは恐らくは仁美。

そしてもう一つの気配。

恐らく仁美の両親のどちらかだろうか。

もしくは相川始、橘朔也、上城睦月の誰かか。

少なくとも魔法少女の気配ではない。

「急がないと志筑さんが危ないわ……」

しかし仁美の気配と魔女の気配は離れている。

そこまで急ぐ必要はない。

ほむらは歩きながら仁美にバレた場合の言い訳を考え出したが、思い付かない。

下手に魔法少女の事を知られる訳にはいかない。

そんなことを考えている内に別の事を考えている自分に気がついた。

美樹さやかの事だ。

今までの世界ではさやかの末路は悲惨なものだった。

魔法少女になれば魔女になるか戦いに敗れて死ぬか。

魔法少女にならなければ魔女の餌食になるかワルプルギスの夜の災厄によって死ぬか。

そのどちらかだ。

そして今までのさやかならほむらの事を嫌って、ほむらにとっては障害にしかならない邪魔者だった。

しかし今回の世界のさやかは何かが違っていた。

いつもならば巴マミの告げた真実を知ればその場で魔女化してもおかしくはない。

しかし今回はショックは受けているものの、魔女化の兆候すらない。

ほむらは考えた。

さやかの魔女化の原因は魔法少女＝魔女の真実を知るか、志筑仁美の想いを知って上条恭介にも想いが通じない事だ。

いっそのこと、この場で仁美を見捨ててしまえば上条恭介が原因で魔女化する可能性もなくなるかもしれない。

今までの世界では試さなかったことだ。

だが、鹿目まどかが悲しむ。

まどかの悲しむ顔は見たくない。

そしてさやかも。

もう誰にも頼らないと決めた筈なのに……。

非情になれない。

出来ればさやかも、マミも、杏子も、そしてまどかも、誰も死なない未来へ行きたい。

諦めていた。

だがこの世界でならあるいは……。

仮面ライダーというイレギュラーな存在がいればその未来に行けるかもしれない。

前回の世界ではそうだった。

ワルプルギスとの決戦の最中に現れた二人の仮面ライダー。

一人は相川始、仮面ライダーブレイドともう一人の黒いライダー。

そこまで考えたほむらは異変に気付く。

仁美の気配が魔女の気配が近い。

恐らく魔女に遭遇してしまったのだろう。

ほむらは盾に付いている砂時計の砂を止める。

ーカチンー

そして時間が停止する。

今は急がなければ仁美が危ない。

ほむらは駆け、魔女の気配に近づいていく。

途中で使い魔を見たが今は無視する。

そして重厚な扉が現れ、扉を開ける。

そこには色とりどりの鮮やかな花が咲いている花畑だった。

その中心に君臨する巨大な花。

薔薇、パンジー、チューリップなどの色々な花が融合して出来たような気持ちの悪い花の女王。

ほむらは仁美の姿を探す。
仁美はすぐに見つかった。

花の魔女の触手に絡め捕られ苦しそうな表情を浮かべている。

ほむらは銃を取り出して触手に向けて発砲する。

ーパァンー
ーパァンー
ーパァンー
ーパァンー

銃弾は触手の直前で停止した。
後は時間停止を解除すれば仁美は助けられる。

魔女を倒せば結界は消える。

ほむらは更に魔女の中心、気持ちの悪い花の塊に向かって数発の爆弾を仕掛ける。

ーカチンー

時間停止解除。

仁美は一瞬だけ驚いた顔をして咳き込む。

「ーーげほっーーげほっ……」

拘束されては時間停止をしても意味はない。
このままでは自分も仁美も死ぬ。
触手に絞め殺される。
更に無数の触手が地面から伸びてくる。
もうダメだ。
でも諦めたくない。
もう誰にも頼れない。
やはりまどかだけ守ろうとすればこんなことにはならなかったのかもしれない。
仁美は既に気絶しているらしい。
触手が徐々に絞められ、意識が遠退く。
《エヴォリューションキング！》

第１５話「もう誰にも頼れない」（後書き）

今回はほむらから見たさやかみたいな回でした。
なんか少しダレてきた感じがします。

まだ問題がトライアル、ガイアメモリ、謎の青年、キュゥべぇの行動、そして全員でワルプルギスを迎えなければ……。
天音ちゃんにも活躍してもらわないとな。

この世界のほむらは迷っているみたいですね。
まぁ仮面ライダーというイレギュラーが関わってきてしまうとどうしても期待せずにはいられない状態ですね。

タグで気付いた人もいるかもしれませんが、いずれあのライダーが出ます。

それではまた次回。

第１６話「仲間を頼ってくれ」（前書き）

最初は始と天音ちゃん中心に書こうと思ってたけど、ハッピーエンドを目指すと解決しないとマズい問題が山積みだよコンチクショー！

しかも始一人じゃどうしようもならないし……。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第１６話「仲間を頼ってくれ」

《エヴォリューションキング！》

「うおぉぉぉ！！」

ほむらを締め付けていた触手が緩んだ。

ほむらと仁美が落下する。

そして誰かに受け止められ、ゆっくりと寝かされる。

瞳を開けると見知らぬライダーがいた。

「……大丈夫か？」

その声には聞き覚えがある。

金色の装飾が成された緑色のライダー。

そのライダーは蜘蛛の足の形をした杖を携えている。

「上城、睦月……？」

ほむらが呟く。

「アタシもいるぞ？」

仁美を寝かせながら佐倉杏子が言う。

「もう大丈夫。あの魔女は俺達にまかせろ」

黄金のレンゲル。

仮面ライダーレンゲル・キングフォームが杖を構える。

しかしこの魔女は手強い。

植物の特性なのだろうか、斬撃や打撃が効かない。

更には燃やしてもすぐに再生する。

「相手が植物なら……」

レンゲルKが3枚のカードをキングラウザーから取り出す。

「多分、杏子ちゃんの出番はないかも」

カードをラウズしようとするレンゲルKに花の魔女の触手が迫る。

すぐに回避の態勢を取ろうとするが間に合わない。

「誰が出番ないだって？」

杏子が迫る触手を次々と切り裂く。

「何をするか知らないけど援護はまかせな！」

レンゲルKが頷いて3枚のカードをラウズする。

1枚目はカテゴリ4のラッシュライノセラス。

《ラッシュ》
2枚目はカテゴリ6のブリザードポーラー。
《ブリザード》
3枚目はカテゴリ8のポイズンスコーピオン。
《ポイズン》
その3枚の生み出すレンゲルKのコンボ。
《ブリザードベノム》
3つのアンデットのエネルギーがレンゲルKに宿る。
レンゲルKが高く跳躍する。
杏子もそれを追い掛けて跳躍。
レンゲルKに迫る触手を次々と切り裂き、レンゲルKを守る。
「ありがとう杏子ちゃん!!」
ラウザーから冷気を噴射しながら一直線に花の魔女に迫る。
冷気が魔女を凍らせる。
ここまでくれば杏子の援護は必要ない。

それを理解したのか、杏子がすぐに離脱してほむら、仁美、そして自分を守る結界を張る。

「はぁあぁぁぁぁ！！」

クラブのカテゴリK、タランチュラアンデットの力が宿った杖を魔女に突き立てる。

カテゴリ４の効果でその突貫力は強化され、魔女に深々と突き刺さる。

そしてカテゴリ８の効果で全ての生物に死をもたらす程の猛毒をラウザーから流し込む。

流し込み終え、レンゲルKが離脱する。

魔女は氷と共に溶け始めた。

着地したレンゲルKがほむら達の元に駆け寄る。

「なんだよ。物凄い爆発でもするのかと思って覚悟してたのによ」

杏子が槍を肩で担ぎそんなことを言う。

「ごめん。ただ魔女相手だとどんな反応が起こるか解らないからね。ナイスだよ」

魔女の結界が消滅したので杏子とレンゲルKが変身を解く。

ここは志筑邸のリビングだろうか。

仁美をソファーに寝かせる。

それと同時にリビングに向かってくるであろう足音が聞こえる。

ドンドンドンドン！

ガチャリとドアが開き、一人の青年が入ってくる。

仁美の兄だろうか。

ほむらはそんな話しは聞いたことがない。

「仁美ちゃん！」

仁美がソファーに寝ている姿を見て安心したようだ。

鋭い表情が和らぐ。

しかしほむら、睦月、杏子の姿を見付けて再び険しい表情をする。

「泥棒かッ！！仁美ちゃんに何をしたッ！」

青年が構える。

これはマズいと思った睦月がほむらを抱き抱え、杏子を連れて開いていた窓から飛び出した。

「てめッ！逃げんのかコンチクショー！」

青年の追い掛けて来る声がするが、そんなのは気にしていられない。
とにかく睦月は声が聞こえなくなるまで走り続けた。
そして頃合いを見計らって公園のベンチで休むことになった。
「はぁ……。二人共大丈夫？」
睦月は買ってきたドリンクを二人に渡しながら言った。
「アタシは大丈夫だよ。全く、アンタも無茶するね」
缶コーラのプルトップを空け飲みながら杏子が言った。
「ええ、感謝するわ」
俯き、缶コーヒーを持ったままほむらが言う。
「でも無事で良かった。次からは俺達にも頼ってよ。仲間なんだからさ」
ほむらが唇を噛む。
「仲間なんて……いらない」
その言葉に睦月の表情が険しくなる。
「どうして？」

「仲間に頼っても無駄だから……。すぐに裏切るか死ぬかのどっちか……」

ほむらは弱々しく言って更に深く俯く。

「でもさ、信じなくちゃ何も始まらない……。俺なんてさ」

睦月が続ける。

「仮面ライダーに相応しくない人間なんだ。ただ自分を変えたいって理由でライダーになって……」

「邪悪なカテゴリAに乗っ取られてさ。沢山の人達を傷付けて……」

睦月は悲しげな笑みを浮かべる。

「それでさ、ある人が俺を信じてくれたんだ。君はそんなに弱くないって……。それでも俺は……」

闇に支配され続けた。

「でも結局はその人達のお陰で俺は俺でいられる。その人達と共に闘い続けるって決めたんだ」

睦月の言葉が？その人？から？その人達？になったのが少し気になった。

「そんなに裏切られて……、何で人を信じるって言うのッ！？」

睦月は笑った。

「だって、俺が人を信じたいから。信じたいって思うから……。だから俺は人に頼れるんだ。だから俺は人に頼られたいって思えるんだ。だからほむらちゃん……」

睦月が真っ直ぐにほむらを見つめる。

「俺達を、仮面ライダーを、魔法少女を、仲間を頼ってくれ」

「勝手に魔法少女を付け加えるな」

横から杏子が口を挟む。

「ま、アタシは構わないけどね」

杏子がチョコレート菓子をくわえながら言う。

ほむらは睦月と杏子を見つめた。

まだ答えは出ない。

「少し、考えさせて……」

ほむらが立ち上がって歩き出す。

「俺達は、いつでも君を受け入れる……」

睦月が立ち上がって立ち去るほむらに言う。

ほむらの後ろ姿が少しだけ微笑んだように見えた。

第１６話「仲間を頼ってくれ」（後書き）

書いてる時に嶋さんと虎姐さんの事を思い出してしまいました。

そしてギラファの奴が睦月を騙してたのも思い出してしまった……。

ギラファはキャラクターとしては好きだけど睦月を騙したのが許せん……。

詩神でした。

第１７話「もっと馬鹿になれ」（前書き）

今回はまどマギやらライダーやらから名言のオンパレード！

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第17話「もっと馬鹿になれ」

頬の痛みで巴マミは目を覚ました。

場所は見覚えがある場所だった。

朝の光がやけに眩しい。

だが違和感。

その正体は家具の位置、ベッドの装飾、カーテン。

恐らくはマミの住んでいるマンションの別の部屋なのだろう。

「私、は……」

記憶を辿る。

キュゥべぇに連れられ戦えるようになり、その副作用だろうか魔女にもなれなかった。

そして美樹さやかを襲い、赤い仮面ライダーと戦った。

「やぁマミ。気分はどうだい？」

窓の外から声がした。

その声を聞いた瞬間、記憶が蘇ってくる。

「アナタ、私達を騙していたのね……？」

マミの声は震えている。

「騙すなんて人聞きの悪いこと言わないでよ。僕は聞かれなかったから答えなかっただけだよ」

そんな言い訳が通るわけがない。

「第1、君が魔法少女にならなかったら君は死んでいた筈だよ？感謝されるんならともかく、そんなのは逆怨みだよ」

確かにそうだ。

マミは何も言えない。

「今日、僕が来たのは何も君の恨み言を聞きに来た訳じゃないんだ。ちょっと頼み事があるんだ」

そんなのは聞く義理はない。

「僕の仲間にイレギュラーが現れたんだ。僕は仲間と意識を共有しているけど、最近1つの個体に異変が起きたんだ。仮面ライダーを見付けたらしくてね。突然その個体に異変が起きたんだ」

マミは思い出す。

キュゥべぇを殺しても殺してもキリがなかったことを。

「放っておけば厄介なことになりそうなんだ。だから見付けたら僕に教えてほしいんだ」

そう言ったキュゥべぇの気配が消える。

「そんなの……」

教えるわけがない。

確かに数年は生き延びられた。

でもこんな形で生き延びたって意味がない。

魔法少女の力を手に入れたのは感謝している。

自分は正義の味方として数多の魔女を倒して来た。

何の見返りもなく、ただ孤独に戦い続けた。

わからない。

自分がこんなにも一生懸命戦ったのにこんなことって……。

ーガチャリー

突然、ドアが開いた。

「気がついたみたいだな」

入ってきた男にマミは見覚えがある。

「俺は橘朔也。仮面ライダーギャレンだ」

「どうして……、どうして私なんか助けたんですか！？あのまま魔女になってればこんなにも……」

マミの瞳から涙が零れた。

「だって助けてって言っていたから……。心の中で助けてって。魔女になりたくない。正義の味方でいたいってさ」

橘はベッドの横の椅子に座り言った。

何処と無く笑っているようだ。

「もう私には無理よッ！魔女になる運命なのよ？今まで守ってきたものを自分で壊すのよ！？」

「なら運命と戦えば良い」

静かに、しかしはっきりと橘は言った。

「戦っても無駄よ！いつか魔女になるならいっそのこと殺せば良かったのに……」

「でもいつかは今じゃないよ。君が絶望さえしなければきっと魔女にはならない」

「でも正義の味方になれないのなら……」

「正義の味方なんてならなくて良い」

橘は悲しげな笑みを浮かべる。

「俺を救ってくれた人に言われたんだ。？もっと馬鹿になれ？ってね」

マミは何も言えなくなった。

橘朔也は何もかも見透かしている。

「君が運命に負けそうになったら俺も一緒に戦うよ。君の事、放っておけないんだ。何て言うか、君は俺に似ているから……」

優しい声。

「ほ、本当に一緒に戦ってくれるんですか……？」

橘は優しく頷く。

「仮面ライダーは助けを呼ぶ人達を見捨てないよ」

マミの目から涙が一気に溢れ出す。

「うぁぁあぁぁぁぁん！」

マミが橘の胸を借りて泣き出す。

橘もゆっくりとマミの肩を抱き締めて頭を撫でる。

「大丈夫。大丈夫だよ。魔女になんかさせない。魔法少女を助ける方法を……」

マミの中に巣食っていた恐怖心と絶望が全て涙に形を変えて流れ出す。

「必ず見付け出す」

◆四日前◆

《ゴースト！》

魔女の結界の中、電子音が鳴り響く。

とある仮面ライダーがＵＳＢメモリのボタンを押すとそんな声が流れた。

それを黒いブレイラウザーに酷似した剣に装填する。

ブレイラウザーと違うのはメモリを装填するスロットがあるだけで、カードをラウズすることも出来るらしい。

《ゴースト・マキシマムドライブ！》

今度は装填したメモリから声が流れ出す。

そのライダーの姿が透ける。

猫のような魔女の巨大な爪がそのライダーを襲う。

が、爪がライダーの透けた身体に空振ってしまう。

そしてライダーの身体が宙に浮き、消える。

「ーーーー！」

「ゴーストザンバットッ！」

刹那、魔女の身体がズタズタに切り裂かれ、結界が解除される。

そのライダーが地上に降り立ち、バックルのレバーを引く。

バックルから黒いゲートが出てきて、ライダーがそれと通り抜ける。

「やっぱり必殺技叫ぶのダセぇな……。……ん？」

青年は何か違和感があることに気付く。

「……使ってみっか」

青年は言ってからカメラを取り出す。

それに黄色いメモリを差し込む。

《ルナ・マキシマムドライブ！》

カメラがコウモリに変形して、黄色い光をフラッシュしながら何回もシャッターが押される音がする。

ーカシャッー
ーカシャッー
ーカシャッー
ーカシャッー
ーカシャッー

やがてフラッシュに照らされ不思議な生き物が姿を現す。

「……驚いたよ。まさか普通の人間に姿を見せる事になるとはね」

白い生き物、キュゥべぇが言う。

「てめぇがキュゥべぇか。てめぇ、魔法少女を魔女にして何を企んでやがんだ？一体どれだけの魔法少女が悲しい思いをしてんのか知ってんのか？」

「君に言う筋合いはないね。僕には人間で言う感情がないんだ。君達の言葉を理解しろなんて無茶言わないでよ」

青年が笑う。

「じゃあまず理解してもらうぜ……？」

青年がピンク色のメモリを出す。

《ーーー！》

電子音が鳴り、キュゥべぇに近付く。

キュゥべぇが逃げようとするが、青年が投げたメモリがキュゥべぇに刺さり、徐々にキュゥべぇの身体に吸い込まれていく。

第17話「もっと馬鹿になれ」（後書き）

ゆま……。

桐生さん……。

剣崎……。

謎の青年再び登場。

彼は剣世界の関係者なのか、ダブル世界の関係者なのか、何者なんだ！

まぁ俺は知ってるんだけどね。

第１８話「あたしなんかで良ければ……」（前書き）

ついに仮面ライダーフォーゼが始まりましたね。

なんか詩神の回りの人達は微妙だとか言ってました。

いや、戦闘スタイルカッコ良すぎだろ……。

ただ弦太郎がフォーゼドライバーを取り上げた時には思わずジャイアンが浮かんだのは俺だけじゃないと信じている！

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第18話「あたしなんかで良ければ……」

「てめぇどーゆーつもりだッ！」

佐倉杏子が暁美ほむらに掴み掛かった。

ほむらにしてみれば杏子を怒らせるようなことはしていない。

むしろ覚えがない。

「放して。私はアナタに何もしていない」

その言葉を聞いて更に杏子が怒りを露にする。

「知らばっくれるなッ！アタシはてめぇに殺されかけたんだぞ？」

ほむらは思い返すがそんな事をした覚えはない。

「知らない。私は何もしていない……」

杏子はほむらを突き飛ばす。

「私がアナタを倒したってなんのメリットがないわ。少なくとも二週間後のワルプルギスの夜までは」

杏子にはほむらが嘘を付いているようには見えなかった。

「じゃあどういうことだよ？アタシは確かにアンタに殺されかけたんだぞ？」

「そんなこと私にはわからない」

相変わらずほむらは表情を崩さない。

杏子もどうすれば良いかわからないようだ。

杏子はその時の事を思い出す。

上城睦月と手分けをして魔女狩りをしていると、ほむらが現れた。

そして何も言わずに攻撃を仕掛けてきたのだ。

尤も、あれがほむらの攻撃かどうかは判らない。

ほむらの姿が消え、痛みを感じる。

それと同時にほむらが現れる。

何とか命からがら逃げ出したという話だ。

「少なくともそれは私ではない。私だったら確実なアナタを仕留めるわ」

やはりほむらは嘘を言ってはいない。

「おーお二人さん。この魔法少女さやかちゃんを差し置いて何を話してんのよ？」

二人が声のした方を見ると美樹さやかが立っていた。

いつもとなんら変わりない。

「べ、別に何でもねーよ」

杏子は言ってから気付く。

「あれ、お前確か今日は用事があるって言ってなかったか？」

さやかは笑う。

「あ、あれ？あれは中止になっちゃったのよ。ほ、ほら最近は魔女の出現頻度が多いでしょ？だから魔女を倒す方を優先しないとなってさ」

確かに最近の魔女は出現頻度が多い。

「そうよ。本当は別の用事があったのだけど、美樹さんと相談して魔女討伐を優先したの」

ほむらが言った。

杏子はふーんと頷く。

「そうそう。せっかくだから今日は一緒に魔女退治しない？」

さやかが杏子に言う。

「ま、アタシは別に良いけどね。アンタも一緒にどうだい？」

ほむらは頷く。

しかしほむらの表情は強ばっている。
何かを考えているようだった。
「はぁッ！」
杏子の槍が魔女を貫いた。
魔女は悲鳴も無く崩れ去り、後に残ったのは魔女の卵、グリーフシードだけだった。
結界も解ける。
「よっしゃ。少し手間取ったけど、二人のお陰で何とか倒せたな」
杏子は後衛に回っていたさやかとほむらに言う。
杏子、さやか、ほむらのソウルジェムは多少濁っていた。
杏子は先程のグリーフシードをほむらに目配せをしてからさやかに渡す。
「アタシはストックがあるからお前にやるよ。コイツもストックぐらいはあるだろ」
ほむらは頷く。
「え、本当に良いの？」

杏子は頷く。
「寝床に幾つか取ってあるからね」
「私も少しは残ってるから大丈夫よ」
何処と無くほむらは嬉しそうだった。
「ん、じゃあ遠慮なく貰っておきましょ～かね～」
さやかはおどける様に言ってからほむらを見る。
「アンタのグリーフシードも今はないの？」
ほむらはポケットの中をまさぐってから頷く。
「そっかぁ。じゃあまた敵が襲って来たらヤバくない？」
言われてからほむらは杏子を見る。
「近くに魔女の反応もないし大丈夫だろ？」
「そうね。いざとなったら美樹さんに頼る事になるかもしれないわね」
ほむらの表情は強ばっている。
「そう。なら大丈夫そうだね……」
さやかの表情が変わる。

今この瞬間を待っていたかのようだった。

「ーーッ！」

杏子とほむらが構える。

「お前はッ！」

杏子が叫ぶ。

そしてさやかの姿が変化した。

「アッハッハッハッ！よーやくグリーフシードを使いきった！」

その姿は人型の怪物。

仮面ライダー達からすれば見慣れた不死者。

この場合はトライアルMS（マギカさやか）と呼ぶべきなのだろうか。

もちろん、魔法少女達はそれを知らない。

話しだけは聞いていたが、まさか魔法少女に成り済ませるとは聞いてはいない。

ほむらは盾を構える。

いざとなれば時間停止で逃げられる。

そう踏んでいた。

「おっと逃げても良いけど、次のはまどかに近付こうかしら？」

トライアルＭＳが言う。

その言葉だけでほむらの足を止めるには十分だった。

「なら、この場で倒す……」

ほむらは言うが杏子にすればこれは無謀な戦いだった。

例え勝てたとしても二人共無事では済まない。

最悪、二人共死ぬか魔女化するかのどちらかだ。

「お、おいこの場合は逃げた方が良くないか？」

ほむらは頷かない。

確実にこの場で倒すつもりのようだ。

「アッハッハッハッ！キュゥべぇの言った通りだ！」

トライアルＭＳは叫び無数の剣を召喚する。

「あーッ！もうどうなっても知らねーぞッ！」

杏子は槍を中段に構える。

「君がキバットバットか。それと上条恭介君だね？俺は橘朔也」

病室のベッドで上半身だけ起こした少年、上条恭介は少しどぎまぎ

しているようだった。

相川始、橘朔也と最近やたら見舞いが多いことに慣れないようだった。

勿論その中には美樹さやかも含まれている。

「俺様はキバットバット三世だ。ちゃんと三世を付けて貰わないと困るんだよな～」

橘はハハハと笑う。

「改めて、キバットバット三世だね？話しはさやかちゃんから聞いているよ。それで……」

キバットはパタパタと羽ばたいて橘の肩に留まる。

「大事な話しなんだろ？だったら場所を移そうぜ」

橘は頷いた。

「上条君。少しキバットを借りるよ」恭介は頷いて、さやかの為に椅子を出す。

それが合図だったのか、橘とキバットが病室を出ていく。

「ありがとう恭介」

そう言ってさやかは椅子に座る。

「お礼を言うのは僕の方だよ。君が支えてくれてなかったら今頃僕は……」

恭介の表情が暗くなる。

「良いんだって！あたしも恭介のヴァイオリンが聞きたかったし、何より恭介が元気になってくれたんだからお礼なんて……」

さやかの頬が赤く染まる。

何処と無く恭介も赤い気がした。

「ううん。最初はさやかは僕を苛めてるんだと思ってた。でも同時に、さやかがいたから僕は僕でいられたんだ。キバットにも言われたよ……」

恭介は微笑む。

「お前を支えてくれる人がいなかったらお前は駄目になっていたって……。だからさやか……」

恭介はさやかをじっと見つめる。

さやかの方が更に赤くなり、恭介から目を反らす。

「さやかこっちを見て」

さやかの顔は更に真っ赤になる。

もしかしたら夕陽のせいでそう見えただけなのかもしれない。

「今まで僕なんかを支えてくれてありがとう……。もし、良かったらこれからも僕を支えてくれない、かな……？」

真っ直ぐにさやかを見つめた恭介が言う。

「も、もちろんだよ！あたしなんかで良ければ……」

失神しそうになるのを我慢してさやかが言う。

もちろんその言葉は友人として言われたことも理解している。

「ありがとう。君は最高の友達だよ」

友達でも構わない。

上条恭介が笑ってくれていればそれで良い。

恭介を、全ての人を守りたい。

さやかの中にそんな願いが静かに宿った。

第１８話「あたしなんかで良ければ……」（後書き）

ついに動き出したトライアルシリーズ！

果たして魔法少女達は不死のトライアルシリーズを倒せるのか？

そしてさやかはこれで魔女化する可能性がかなり減ったし、後は仁美をどうにかすれば魔女化は回避出来るかも。

第１９話「さぁ、お前の罪を数えろ」（前書き）

さて、このセリフがあると言うことは……。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第１９話「さぁ、お前の罪を数えろ」

トライアルＭＳが無数の剣を投げつける。
杏子は弾き、交わし、避け、受け、止める。
魔力の残量が少なすぎる。
今は肉体強化と槍のみで戦わなければならない。
尤も杏子自身、普段から肉体強化と槍のみで戦っている為、そこまで苦にならない。

問題はトライアルシリーズは不死だということ。
普通の魔女ならば切れば切れるし刺せば刺さる。
つまり殺せば死ぬ。
だがこの怪物は聞いた話によると不死。
殺すには圧倒的な力で消し炭にするしかない。
弱点を突けば倒せるとも言えない。

「クソッ！どうすりゃ良いんだよッ！？」
杏子はこの戦いに乗り気ではない。
だが暁美ほむらが言うことを聞かないのだ。
この場で倒さなければと焦っているのが判る。

『杏子、聞こえる？』

念話でほむらが話し掛けてくる。
恐らくトライアルＭＳに聞かれたくない話しなのだろう。

『何だよこんな時にッ！』

杏子は苛ついている。
元はと言えばほむらが撤退しないのが問題なのだ。
本来ならば撤退し、増援を求める場面の筈だ。
幸い他の魔法少女や今は仮面ライダー達もいる。
彼らに頼れば良い。
だがほむらはその手段を取らない。

『グリーフシードは一つだけあるわ。手のひらを開いて』

前衛で戦っている杏子にグリーフシードを渡す隙などはない。
だが杏子の手にはいつの間にかグリーフシードが握られている。
いつ渡されたのかは解らない。

『それを使って。私が隙を作るから全力で攻撃して』

確かにその手ならば倒せるかもしれない。

だが杏子の全力攻撃には溜めが必要だ。
しかも巨大な魔女を狙うならともかく、普通の人間大の的に当たるか試したこともない。
十中八九、避けられる。
その前に溜めで潰される。
当たれば倒す自信はある。
『やるしかないわ。始めて』

ソウルジェムをグリーフシードで回復させる。
ただし全快ではなく、全力攻撃は使えて一回。
このまま消耗戦になったら勝ち目はない。

『しっかりサポートしてくれよッ！』

杏子が槍を地面に突き刺す。
そして膝を付き、両手を顔の前で握り締める。
まるで祈りを捧げるような体勢だ。

地面がひび割れ、割れ目から巨大な槍が姿を現す。
その槍が杏子を乗せたまま蛇のように鎌首をもたげる。
ほむらは銃撃でトライアルＭＳの足を止めるが、火力が足りなすぎる。
これでは杏子の攻撃は当たらないだろう。

「駄目だッ！これじゃ狙いが定まらねぇ！」

念話ではなく声に出してしまう。
トライアルＭＳが杏子を見る。
何をしようとしているのかバレたようだ。
これは杏子のミスだ。

「良い考えねッ！でもッ！」
トライアルＭＳが杏子に向かって一直線に駆ける。
一直線とは言うが、微妙に槍の軌道からは外れている。
マズいと杏子は感じた。
恐らくほむらも感じただろう。

「これでおーしまいッ！」
トライアルＭＳは無数の剣を再び召喚し、その内の数本を掴んで跳躍する。

そして剣先が杏子の首筋を捉える。
ほむらは盾を反転させようとする。
だが間に合わない。

「はぁッ！」

杏子の肩を黒い影が掠める。

「ーーッ！」

トライアルＭＳの頭をその影の脚が捉える。

一撃を受け、壁に叩き付けられたトライアルＭＳ。
自分に一撃を与えた影の正体を見た。
黒い身体に紅い目。
肩には紫色の装飾が成されている。

「赤い目の、黒いライダー……？」

ほむらは目を見開いた。
ほむらが以前見た赤と黒のライダーは陽炎のようなオーラに包まれていて、姿は良くは見えなかった。
だが赤い目の黒いライダーだという印象は強かった。

「僕は仮面ライダージョーカー」

黒いライダー、仮面ライダージョーカーが杏子とほむらを交互に見る。

「杏子。僕とほむらがアレを止めるから、その隙に杏子が全力でヤ

ッを攻撃してよ！」

二人は何故自分達の名前を知っているかは聞かなかった。

「行くよ杏子。ほむら」

ジョーカーは相手を指差すような形で左手を前に掲げる。

「さぁ、」

そして手首を反転させる。

「お前の罪を」

俯いていた首がトライアルＭＳを見据える。

「数えろ」

ジョーカーが駆け出す。

そしてトライアルＭＳに果敢な接近戦を押し付ける。

トライアルＭＳも反撃しようとするが剣の矛先よりも更に内の内。

トライアルＭＳは接近され過ぎて剣を上手く振れない。

普通ならばこのような状況は剣以外の体術を使うべきなのだろうが、

生憎トライアルＭＳの元になった美樹さやかにはそのような戦いか

を相川始は教えてはいなかった。

ほむらもジョーカーの隙を見付けてはそれを埋めるように銃撃でフ

ォローする。

「杏子ッ！準備は良いかい？」

ジョーカーは叫び、杏子は分かったと叫ぶ。

「ほむらッ！フォロー頼むよ」

頷くほむら。

ジョーカーはロストドライバーからＪのメモリを抜き、手で隠すような仕草でＪのメモリに何かをする。

それを腰のメモリスロットに差し込む。

《サイクロン！ジョーカー！マキシマムドライブ！》

電子音が響き、ジョーカーを中心に風が巻き起こる。

「ジョーカーエクストリーム！」

ジョーカーが叫び、風を纏い跳躍する。

「今だよ！」

そしてトライアルＭＳに強烈なキックを食らわす。

だが、トライアルＭＳはギリギリの防御に間に合った。

トライアルＭＳが顔を上げる。

と同時に杏子の全力を込めた槍がトライアルＭＳを貫いた。

貫いたという表現が正しいのかは判らない。

ただ杏子の槍が触れた瞬間に消し炭になったと表現した方が正しいのだろう。

とにかく、トライアルＭＳはこの世界から消えた。
「お前なんでグリーフシードがないなんて嘘をついたんだ？」
「今日の美樹さんの用事はきっと魔法少女よりも大切なことなの。だから最初から怪しいと思っていたの」
そう。
ほむらはさやかとは約束も何もしていない。
ほむらの嘘に騙されたトライアルＭＳはまんまとほむらの嘘に踊らされたというわけだ。
「それにアナタが言っていた私の偽者のことも気になったしね」
ほむらはジョーカーの方を振り向く。
「正体を……？」
そこには誰も居なかった。
しかしほむらの中に仮面ライダージョーカーの名前が刻まれたのは確かだった。
赤い目の黒いライダー。
ワルプルギスの夜との戦いにおいて切札となりうる存在。
ただ一つ気になるのはこの世界の仮面ライダージョーカーが白い力を持っているかどうかだった。
とにかく今は仮面ライダージョーカーの正体を探す事を優先するべきなのだろう。
ほむらは杏子にお礼を言ってこの場所から足早に立ち去った。

第１９話「さぁ、お前の罪を数えろ」（後書き）

仮面ライダージョーカー参上！

ぶっちゃけ正体はオリジナルではないですはい。

そしてなんと彼はサイクロンメモリを所持してません。

次回をお楽しみにッ！

第２０話「私、あの怪物知ってる……」（前書き）

久々に天音ちゃん登場。

そしてまさかの彼女がメインキャラに！

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第２０話「私、あの怪物知ってる……」

相川始は栗原遥香の部屋を掃除している時、嫌な感じを感じた。
いつもならば遥香の部屋の掃除などはしない。
だが当の遥香が病で倒れ動けないので始が頼まれたのだった。
その感じの元はスタンドが置いてある机の引き出しの中。
始は気が引けたが、引き出しを開けてみた。
そこには黒いＵＳＢメモリ。
【Ｍ】と書かれたそれからは凄まじい負の感情が伝わってくる。
これを持つものを不幸のドン底に陥れるような、それも時間を掛けてじわじわと所有者を追い詰めるような嫌な感じだった。

「これは……」

始は呟いてふと背後を見る。
そこには天音の母、遥香が立っていた。
生気のないその瞳に始は写ってはいない。

「あ、遥香さん。もう終りますから」

始は言いながらポケットにそのメモリを仕舞う。
その後、遥香を寝かせてから部屋を出た始は咄嗟に仕舞ってしまったメモリの事を思い出す。
また部屋に入って遥香を起こしてしまったら悪いので、後で返す事にした。
ポケットにそれがあるのを確認する為、ジーパンのポケットを叩く。
何かボタンを押したらしい。
感触があった。

《マジョ！》

ビクンと震えてから辺りを見回すが、変化はない。
どうやら先程のメモリから音が出たらしい。

店の入口に行こうとした始は、違和感を感じた。
この感じは以前にも感じたことがあった。
始の中の怪物が目覚めようとしているような、あの忌々しい感じ。
有り得ない。
ハートのカテゴリの１３枚のカードで押さえている筈の怪物が何の理由もなく目覚める筈がない。
始はそれを必死に否定する。
有り得ない。
有ってはいけない。
有ってはならない。
ある筈がない。
ハートのカードは全て所持している。
有り得る理由がない。

「うっ……何故だッ……」

額から脂汗が滲む。
押さえられない。

始は外に出て走り出す。
今、ジョーカーに戻ったら戻れない気がした。

有り得ないアリ得なイ有りエないアり得ナい有リ得ナイ有り得なイ
有リエないアリ得なイアリエナイアリエナイアリエナイ
アリエナイアリエナイアリエナイアリエナイアリエナイ

アリエナイアリエナイアリエナイアリエナイアリエナイアリエナイアリエナイ
アリエナイアリエナイヤメロ

始は獣に戻った。

「あ、仁美ちゃん。今帰り？」
志筑仁美に声を掛けたのは仁美の家に居候している青年、鷹羽虎之介（たかばとらのすけ）と言う名の青年だった。

「えぇ。今日はお稽古がお休みなので、今から帰る所ですの」
仁美は口元を押さえながら笑う。

「そっか。なら一緒に帰ろうぜ。どーせ帰る場所は一緒なんだしよ」
虎之介はニヤニヤと笑っている。
いやらしい笑いではなく、どちらかと言えば爽やかな笑いだ。
バイクに跨がっている姿を見る限り、どこにでもいるような爽やかで気の良い好青年と言った感じだ。

「とりあえず乗れよ」
虎之介は仁美にヘルメットを手渡し、自身もヘルメットを被る。

「いえ、バイクは危ないので出来れば……」
仁美の気持ちを察して虎之介はヘルメットを脱いで、仁美に渡したヘルメットをバイクの中に納める。

「相変わらず堅いね。ま、それが仁美ちゃんの良いところだけどよ」
口元を押さえながらウフフと仁美は笑う。
虎之介も同じように笑う。
仁美は彼のおかれている境遇を思い出すがそれを表情に出さないまま、他愛ない会話をしている。

鷹羽虎之介には一年より以前の記憶がないらしい。
海岸で倒れている所を誰かに助けられたらしいのだが、虎之介は多くは語らない。
虎之介が言うには、流れ流れて見滝原に来たと言っている。
仁美との出会いは志筑邸の庭で倒れているのを仁美が発見したという話だ。

「しっかしこの前の泥棒は一体なんだったんだろうな。何を盗むわけでもないし、いきなり逃げてった感じだったよな」

仁美はその泥棒事件を知らない。
その前後の記憶があやふやで思い出せない。
気付いた時には虎之介が騒いでいて、宥めるのが大変だったということだ。
「泥棒の中の一人にはなんか見覚えがあるんだけどな……。思い出せねぇ」

虎之介は泥棒事件のことを未だに騒いでいるのだが、仁美はそこまで気にはしていない。

仁美は虎之介の話を聞いていると、視界の中に違和感を感じた。
虎之介の話が耳に入らずに、視界の違和感の正体を探る。
正体はすぐに理解出来た。

日常の生活では有り得ない光景がそこにはある。
自分と同じ制服を着た少女が何かに襲われている。
カミキリ虫を無理矢理人型にして、緑色のフルフェイスヘルメットを付けたような怪物だった。

仁美の視線に気付いたのか、虎之介は視線の先を見る。
虎之介の判断は早かった。
すぐにバイクに跨がり、カミキリ虫の怪人に向かって行く。

「ま、待ってください」

仁美は言うが虎之介は聞かない。
仕方なく仁美は虎之介を追い掛ける。
もちろん少女を逃がす為に行動するつもりだ。
虎之介もそのつもりだろうと思う。

仁美は少女に駆け寄る。

「大丈夫ですか？はやっ……？」

少女の陰にもう一人少女がいた。

「鹿目、さん？」

「仁美ちゃん！？」

二人は目を合わせてから、状況を思い出す。

「仁美ちゃんッ！！逃げてッ！」

あろうことか虎之介が怪人に掴みかかっている。

「早くッ！」

虎之介は叫ぶが、怪人に振りほどかれ吹き飛ばされる。

「鷹羽さん！？」

仁美は駆け寄ろうとはするが、鹿目まどかに止められる。
まどかは大丈夫そうだが、もう一人の少女の方が怯えきっていて、立ち上がることすら出来ない。

「天音さん！」
まどかは泣きそうな声で叫ぶが、天音と呼ばれた少女には聞こえていないようだ。

よく見ると天音はブツブツと何か呟いている。

「は……さ…は…め……」

怪人がゆっくりと歩いてくる。

仁美もまどかもそれが限界だったのか、動けなくなる。

「助け……は……」

天音は相変わらず何かを言っている。

怪人の動きが一瞬だけ止まった気がした。

その隙に再び虎之介が飛び掛かる。

「早くッ！」

動けなくなった3人には何も出来ない。

「しゃあねぇッ！アンクッ！」

虎之介の右腕に変化が現れた。

腕が異形の姿に変わり、スポンと虎之介から分離する。

『コイツはグリードでもヤミーでもないぞ』

異形の腕から声がして、怪人に殴り掛かる。
倒せはしないが、ダメージは与えられるようだ。
何発か殴った後、再び虎之介の腕へと戻る。

『トラ！変身しろ！』

異形の腕から3枚、メダルが出てくる。

左腕には穴が3つ開いたバックルが握られている。
それを腹部に翳すと腰に巻かれる。

赤いメダルを異形の右手に、黄と緑のメダルを左手に握り、赤と緑のメダルをバックルの左右に、黄のメダルを真ん中に入れる。

そして腰の円盤、オースキャナーをバックルに通す。

《――キンキンキン――》
澄んだ電子音が響く。

「変身ッ！」

《タカ・トラ・バッタ！》

《タ・ト・バ！タトバタトッバッ！》

赤いメダルが頭に。
黄色いメダルが上半身に。
緑色のメダルが下半身に重なり、虎之介の姿が異形に変わる。
その姿はこの世界の仮面ライダーではないメダルの戦士、仮面ライダーオーズだった。

「え？虎之介、……さん？」

仁美が呟く。

「仮面、ライダー？」

既にブレイドの変身を見ているまどかは驚きはしたが、状況は理解出来た。

「仁美ちゃん。おれは大丈夫だから二人を連れて逃げろ」

オーズは言ってから構えを取る。

仁美はこの状況が良くわからなかったが、戦い慣れているらしい虎之介の姿を見る限り、安心出来た。
まどかは頷いて天音に肩をかす。
仁美も今、優先すべきなのは天音だということを理解して、まどかと同じように肩をかした。
「行くぜジョーカーッ！」
いつ名前を知ったのか、オーズは叫び最強のアンデット、ジョーカーへと向かって行く。
仁美、まどか、天音はその場を去った。
「落ち着きましたか？」
仁美は紅茶を天音の前に差し出し、言った。
天音は頷いてからティーカップを持ち口に運ぼうとするが、カタカタと震えているのが仁美とまどかには見てとれた。
「鹿目さん、先程仮面ライダーとおっしゃっていましたが、何か知っているのですか？」
まどかは何かを考えてから頷く。
「う、うん。昔そんな噂があったから……。それ思い出しちゃって」
少し慌てたようなまどかの表情を仁美は見逃さなかったが、今それを問い詰めても話してはくれないだろう。
仮面ライダーの噂なら仁美も知っていた。
６年程前に流行った噂で、内容は異形の怪物と戦う鎧の男達が存在するという噂だった。
「始さん……」

天音が呟く。
仁美は誰のことだかわからないが、何となくだが天音の大切な人の名前だろうかと思った。仁美にとっては？彼？のような。

「私、あの怪物知ってる……」

その言葉に仁美とまどかが顔を合わせる。

「アンデット……」

その怪物の名前だろうかと、仁美は思う。
まどかは何かに驚いたような表情をした。
以前、その名前を聞いたことがあるのだろうか。

「6年前にね。叔父さんの友達が仮面ライダーだったの。私もアンデットに襲われたりしたけど、剣崎さんが助けてくれた。あの緑色のアンデットは何度か見たことがあるよ……」

天音は暗い顔をする。

まどかは何も言えなかった。
キュゥべぇに言われた言葉。

相川始はアンデットだ。
相川始があの怪物と同じだということだということがまどかは信じられない。
あれほど人間らしい人間も滅多にいないだろう。
あれほど優しい人は滅多にいないだろう。

天音は始がアンデットだと知ったら何を思うのだろう。

キュゥべぇと契約したら何を願うのだろう。

まどかは何も言えない。

第２０話「私、あの怪物知ってる……」（後書き）

ようやくオーズ出せたぜ。
この世界にいるオーズはオーズの世界の人間で、この世界には都合の良い例のオーロラに巻き込まれた感じで来ちゃったオーズだったりします。

そしてまさかの魔女のガイアメモリ登場。

そのメモリが惨劇を巻き起こすのか、はたまた最強の切札となりえるのかは、俺次第！ただしどっちにしろどんな話しは考えてあります。

第２１話「守ってやってくれ」（前書き）

フォーゼのスコーピオンのヤツの蠍子拳がやたらにカッコ良すぎだろ。

蠍子拳を初めて見たのは何だっけな……。

確か某お笑いコンビの片割れが主演の無問題って映画だったかな。

あと話しはそれるけどリベリオンって映画のアクションがすごかったな。

あの戦闘スタイルのライダーが出たらかなり好きになりそうだな。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第２１話「守ってやってくれ」

病院前、橘朔也はレッドランバスに跨がりながらウィッチサーチャーを見る。

「ジョーカーの反応が……、消えた？」

橘朔也はウィッチサーチャーの反応を見て言った。
正確にはアンデットサーチャーなのだが、今はそう呼んでいる。
アンデットの反応を捉えたのは何年ぶりだろうと思うが、今はそんなことを考えている場合ではない。
有り得ない。
相川始がジョーカーに戻ること自体が有り得ないのだ。
ハートのカテゴリ全てでジョーカーを押さえているはずなのだ。

「オイオイ。どうゆう事なんだよ？」
顔の周りを飛び回りながらキバットバット三世が言う。
先程、キバットから？全て？を聞いた橘は早速準備に取り掛かろうとしていた矢先にサーチャーの反応があったのだ。
先程の話は間違っても今は魔法少女の関係者に知られてはいけない。
特に鹿目まどか、暁美ほむら、栗原天音、そして相川始。
キバットの話が本当ならば彼女等には余りにも酷な話だ。
特に暁美ほむらに至っては推測の域は出ないが、酷すぎる話だった。
いずれ話さなければならないのはわかっている。

「キバット。今は上条君の所に戻っていてくれ。さやかちゃんには俺は帰ったと伝えてほしい」

そう言ってレッドランバスを発進させる。

「あいよ〜。って俺様またお守りかよ〜！」
嘆くキバットを後目に橘はジョーカーの反応があった場所に向かった。
「……逃がしたか。しかしアイツ何だよ」
鷹羽虎之介は変身を解いて呟いた。
『お前さっきジョーカーとか言ってなかったか？』
右腕に宿るグリード、アンクが言う。
「そうか？……覚えてねぇや。それより仁美ちゃん家に戻ろうぜ。腹減っただろ？あ、それとアイスキャンディーは無しな。腹壊すし」
駄々を捏ねるアンクは放っておき、虎之介は仁美に言う言い訳を考え始めた。
どこから話そう。
別の世界から来たって言っても信じてもらえないだろう。
そしてオーズになった理由やらアンクを紹介しなければならないことに頭を痛めていた。
『トラ。お前、全部話すつもりじゃないだろうな？』
「ん？まぁそりゃあ話さないと。お前も紹介しなきゃならんだろーし」
『馬鹿野郎。お前そんなこと話したらどうなるのかわかってんのか

？ユキとは違うんだぞ』

虎之介はため息をつく。ユキとは虎之介のいたオーズの世界で出会った少女の名だ。
その少女はオーズになった虎之介を受け入れてくれた。

「わかんねぇよ。だけど黙りよりゃ良いだろ。拒絶されたらそん時はそん時だろ」

虎之介のポジティブ思考にアンク従わざる得ない。
そのポジティブ思考のお陰でアンクは裏切られる心配はない。
そしてだからこそアンクは虎之介をオーズに選んだのだ。

「さてと」

虎之介はライドベンダーに跨がる。
そして走り出そうとして声を掛けられた。

「君！」
いきなり呼び止められて虎之介は振り向いた。
見知らぬ男がこちらに向かって歩いてくる。
まさか先程の戦闘を見られたのだろうかと虎之介は思う。

「何だよ」

「さっき何かに見なかったか？」

声を掛けてきた男、橘朔也が言った。

虎之介は少し考えてから言う。
「ん。まぁ変な怪物を見たけど。何？アンタまさか何か知ってんの？」
虎之介の馴れ馴れしい口調に橘は眉を潜める。
別に年下の人間にタメ口を使われて気分を害した訳ではない。
何か、虎之介から人間以外の気配を本能的に感じ取ったのか。
「君は何なんだ？人間以外に何か、別の気配が……」
この世界の仮面ライダー達はアンデットと融合して変身するわけなのだが、必然的にアンデットに近付いて行っているのだろう。
普通の人間以上に感覚は鋭い。
一方、虎之介も体の中にアンクとコアメダルを宿している。
やはり普通の人間とは違うのだ。
「アンタ、ただの人間じゃねぇな。さっきの怪物の仲間……？」
虎之介は突如、違和感に襲われた。
虎之介はこの男を知っている。
間違いない。
ただ記憶がない。
ただ本能が告げる。
？この男は敵ではない？
「……なぁアンタ。もしかして仮面ライダー？」
虎之介の言葉に橘は驚いた。

「俺は、仮面ライダーオーズ。多分、別の世界から来た飛ばされて来た……」

いきなりそんなことを言っても信じて貰えないと思った。
だが橘はキバットから全てを聞いている。
その話も難なく信じられた。
「なら、少し話を聞かせて欲しい。そして力をかして欲しい」
虎之介は少し考えてから右手を差し出す。
「俺は鷹羽虎之介。んでコイツが……」
虎之介は右腕に宿ったアンクを出す。
『俺はアンク。ある事情でトラの右腕を借りてるモンだ』
「……う、うわぁぁぁぁぁぁ〜！！」
橘は尻餅を着いて叫び出す。
それは以前、恐怖心に捕らわれ、アンデットに囲まれて戦えない時に出した叫びに似ていた。
カメラの位置を描写するのならば、どアップで斜め４５度ぐらいから映している感じだ。
「ちょっｗｗｗ！橘さん何やってんすか？」
しばらくすると橘は取り乱して済まないとだけ言った。
「ん？君は何故俺の名前を知っている？」

そう言われて虎之介は少し慌ててからため息を付く。

「あ、あぁ何かさっきから知らない筈の名前が出てきてるんで……」

虎之介は記憶喪失の話を橘にする。

何故かジョーカーの名を知っていることも話した。

橘は聞きながら1つの仮説を立てる。

仮面ライダーと魔法少女が同居している世界があるのだ。

仮面ライダーと仮面ライダーが同居している世界があってもおかしくはない。

その仮説を虎之介に話そうとするが、今は止めておいた。

今はこの状況を伝え、協力を仰ぐのが先決だからだ。

「君の話しは大体分かった。この世界の今の状況は……」

橘は虎之介に魔法少女と魔女の存在だけを伝えた。

おいおい。

話しは聞いてたけど何でアイツがいるんだよ。

てか本当にそうじゃねぇか。

てかアイツがいるお陰で出ていき辛くなって来たし……。

ここで俺が？やぁやぁ。君が虎之介君か。話しは聞いてたけど……？

何て言ったりしたら下手すりゃ記憶が戻っちまうじゃねぇかよ。
別に虎之介の記憶が戻っても不都合な事はねぇだろうが……。
アイツはアイツのままでいて欲しいしな。
ジョーカーの気配がしたから来てみればこんな状況か……。
橘さんにゃあ姿を見せても良いと思ったけど、今は止めといた方が良いかもな。
虎之介と会いたくねぇし。
いや、会って話してみたいけど何かな……。
とりあえず今は【M】のメモリを探してワルプルギスの夜を倒さないとな。
まぁ多分、俺はワルプルギスの夜の相手は出来そうもねぇけど、それ以上に厄介なヤツが来そうだし。
そっちの相手はアイツ等に知られねぇ様にしねぇと……。
「なぁユウ。引き続き皆を見張っといてくれ。いざとなったらまた変身して守ってやってくれ」
それを聞いたユウ。
色白の少年はニッコリ笑う。
この笑顔を見るとつい忘れちまう。

コイツがキュゥべぇことインキュベーターで、今は【ハート】と【ヒューマン】のメモリのドーパントだってことをさ。

俺はユウに【ＪｒＣ】メモリとロストドライバーを渡す。

さて俺は剣崎んとこにいってみっかな。

始がジョーカーになったんなら影響が出ててもおかしくはねぇし。

後はこの世界の仮面ライダーと魔法少女の努力次第だな。

まぁ最終決戦じゃあ俺等も戦うぜ。

てかこのループで終わらせねぇと俺の最終目的が達成できねぇし。

さて、剣崎に会いに行くか。

「みんな頑張れよ。始、ジョーカーに戻ってる場合じゃねぇよ……」

第21話「守ってやってくれ」（後書き）

キュゥべぇ人間態の名前が判明。

キュゥべぇだからユウ……相変わらず俺のネーミングセンスを疑うんだぜ。

詩神でした。

第２２話「何者でもないよ」（前書き）

最近、週一更新気味になってるな。
少しペースあげないと……。
魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第２２話「何者でもないよ」

始さんがいなくなった。
携帯も繋がらないし、どこにいるのかも判らない。
あの緑色の怪人が出るときにはいつも始さんがいなくなる。
あの怪人はアンデットで、何度か襲われた事もあった。
でも確か剣崎さん達のお陰でアンデットは全て封印された筈だ。
叔父の白井虎太郎が言っていた。
剣崎さんは旅に出て、連絡をくれないらしい。
だから始さんはたまに凄く悲しい顔をする。
当たり前だ。
始さんと剣崎さんは友達だったのだ。
私だって始さんが本当にいなくなったら何をするかわからない。
きっとキュゥべぇと魔法少女の契約を交わして願い事を叶えてもらうだろう。
？始さんに逢いたい？ってね。
始さんに逢えるならば闘う事だって恐くはない。
そういえば最近、妙な夢を見る。

始さんがいなくなって、街が滅茶苦茶に壊れてて、巨大な影と一人の魔法少女が戦う夢。
途中から二人の仮面ライダー。
でもそれは戦いではなくて、一方的な攻撃の嵐。
そこでキュゥべぇに出会って、契約してしまい、現れたのはあの緑色の怪人。
その続きは覚えてない。
ただ何となくわかるのだ。
あれはただの夢ではない。
必ず何か起きる前兆のような気がする。

『やぁ、栗原天音。久しぶりだね』

フッと見ると窓の外にキュゥべぇがいた。

『君に良いことを教えてあげようと思ってね。入って良いかい？』

私は窓を空けてキュゥべぇを部屋に入れる。

キュゥべぇはトコトコと入って来て、ベッドの淵にピョコンと座る。

「良いことって何？」

正直、キュゥべぇの話が耳に入るか心配だった。

今は始さんのことしか考えられない。

『相川始の居場所を教えてあげようと思ってね』

私はその言葉に飛び付いた。

「どこよッ！？始さんはどこなのよッ！」

私はキュゥべぇに掴みかかった。

「痛いよ天音。案内するから着いてきてよ」

そう言うとキュゥべぇは窓から出ていってしまった。

慌てて玄関で靴を履き、キュゥべぇを追い掛ける。

「はぁ、はぁ……やっと止まってくれたね……」

仮面ライダーブレイドは緑色の怪人、ジョーカーを追い詰めながら

言った。
ジョーカーは樹に寄りかかり動けそうもない。
「君が相川始さんか……。」
ブレイドは自身のライドブッカーをソードモードからブックモードに戻す。
そのライドブッカーには世界の破壊者、ディケイドとは違うところがあった。
それはガイアメモリのスロットが着いていて、破壊者のよりも少しだけ大きかった。
ブレイドは【エクスプロージョン】メモリをライドブッカーから抜く。
「何が君をジョーカーに戻してしまったんだ……？」
ブレイドはカメラを取り出し、黄色いメモリを装填する。
《ルナ！マキシマムドライブ！》
―カシャッ―
―カシャッ―
―カシャッ―
―カシャッ―
―カシャッ―
ジョーカーの体の中に何かが見えた。
「これは……、ガイアメモリ？【M】のメモリだこれ……」
ブレイドはジョーカーの体から【M】のメモリを抜いた。

するとジョーカーの体はヒューマンアンデットの体、相川始に戻っていく。
始はゆっくりと目を開ける。
「剣、崎……？」
額から緑色の血を流しながら始が言う。
まるで夢の中にいるような、微睡んだ口調だった。
「ごめん。僕は剣崎って人じゃないよ。今は名乗れないけど、僕は君達の味方だ」
ブレイドは始のコートのポケットからハートのカテゴリ9、リカバリーキャメルを取り出す。
「そんなボロボロじゃあ家にも帰れないよね。ちょっと借りるよ」
ブレイドはブレイバックルとは違う白いバックルを付けている。
それにリカバリーキャメルのカードを装填する。
《アタックライド！ラウズ！》
電子音がして始の傷が塞がっていき、服も綺麗になる。
「返すよ。メモリは抜いたからもうジョーカーになることはないと思うよ。君が望まない限りね」
始が立ち上がろうとする。
「始さんッ！」

ブレイドは声のした方を見る。
ブレイド本人はその娘の事は知らないのだが、仲間からその娘の事を聞いている。
天音は始を庇うようにブレイドの前に立ちはだかる。
「始さんに乱暴しないで！」
「え、僕はただ……」
ブレイドは狼狽して、それを否定しようとするが、栗原天音に自分の事を知られるわけにはいかない。
「……しないよ。もう帰るから安心して……」
そう言ってブレイドは背を向ける。
「まて！お前は、お前達は何者なんだッ！？」
ブレイドは振り返らない。
「何者でもないよ。ただの名無しさ……」
変身を解いたブレイドの後ろ姿はごく普通の青年の後ろ姿だった。
「始さん大丈夫？」
天音はブレイドを見送ってから振り返る。
始は不思議そうな顔をしている。
何故この場所がわかったのかがわからないらしい。

「キュゥべぇに教えてもらったの。ありがとうね」
天音はキュゥべぇがいるらしき空間を見詰める。
『お安い御用さ。相川始が見つかって良かったね天音』
始にはその姿が見えない。
ただ声は聞こえる。
だが聞こえないふりをする。
「天音ちゃん。帰ろう。今すぐに」
始は天音の手を引いて駆け出す。
キュゥべぇは自分がアンデットだと言うことを知っている。
だから一刻も早くキュゥべぇから距離を取りたい。
「ちょっと始さん！折角教えてくれたのにキュゥべぇに悪いよ」
始は聞かない。
ただ走り続けるしばらく走りハカランダに戻って来た始は天音の両肩を掴む。
「天音ちゃん。絶対にキュゥべぇの言いなりになっちゃダメだ」
始は天音の目を見詰める。
キュゥべぇは何かを企んでいる。
目的などわからない。
ただ天音を危険に晒すわけにはいかない。
？だったら君が守れよ！？

昔、剣崎に言われた言葉を思い出す。
「君は俺が守るから……。だから君が戦う必要なんてない……」
天音は始を見詰めて頷く。
それから何かを言おうとするが、言葉が出てこないらしく、何でもないと言う。
始は玄関で靴を脱ぎ、夕食の準備に取り掛かろうとするが、先に栗原遥香が夕食を作っていた。
「遥香さん。寝ててください。夕食なら俺がやっときますよ」
始は言うが遥香は笑って誤魔化す。
「今日は少し気分が良いの。ずっと寝てばっかりだと体が鈍っちゃうでしょ？」
確かにその通りだが今までの遥香の病状から推測するに、いきなり回復するなど人間の生命力では有り得ない。
だとしたら何か病気の原因が取り除かれたとすれば話は別だ。
始は遥香の部屋にあったメモリの事を思い出す。
そのメモリを手に入れた始も原因不明でジョーカーに戻ってしまった。
ならばあのメモリが原因だと考えるのが妥当なのだろうか。
部屋で着替えを済ませた天音が驚く。
「お母さん？大丈夫なの？どこか悪くない？」
遥香は大丈夫だと言って茶碗にご飯をのせていく。

「今日は沢山食べてね。張り切りすぎちゃってね」
原因が消えたのならば心配する必要などない。
始は三週間ぶりの家族の愛情を味わった。
願わくばこの瞬間が永遠に続けば良いと思った。
『で、君は何者なんだい？』
先程ジョーカーが倒れていた林からそんなに離れていない場所、周りの景色はあまり変わらない。
その場所でキュゥべぇが青年に向かってそう言った。
「何者なんだろうね。僕にもわからないな」
青年はキュゥべぇを睨み付ける。
『そんなの答えになってないじゃないか。僕にが聞きたいのは君はどこから来て何が目的なのかってことさ』
「少なくとも敵ってことになるのかな。君の企みを阻止するつもりだからね」
青年はそう宣言する。
『なら質問を変えよう。君の持っているメモリ。それは何なんだい？見た所、エントロピーを凌駕しているみたいだけど、もし良かったら譲って貰えないかな？』
青年はフンと鼻を鳴らす。

そして答えるまでもないと言う。

『残念だよ。君には悪いけど僕はそれが欲しいんだ。だから力ずくでも貰うことにするよ』

そう言ってインキュベーターは振り返る。

『僕のノルマの邪魔はさせないよ』

インキュベーターの姿が見えなくなったのと同時に木陰からもう一人、青年が出てくる。

目付きが悪く、赤いスカジャンを羽織っている。

「やれやれ。アイツまじ死なねぇかな」

スカジャン青年はそんな毒を吐く。

「無駄だよ。倒してもまた出てくるみたいだし」

「だよな。まるでアンデットじゃねぇかよ。あ、とりあえず橘さんには全部話したぜ。キバットがな」

スカジャン青年はベンチに座る。

そして地味な青年にポイっと缶コーヒーを投げる。

「信用できるの？」

「そりゃあな。俺がブレイドの世界にいた時に世話になった人だ。ま、こっちの世界の橘さんとは別人だけど橘さんは橘さんだし。ただたまに騙される事があるけど……」

「ダメじゃん……」

「うっせー」

それから沈黙が続いた。
そしてスカジャン青年が口を開く。

「なぁ、お前の推測が本当だとするとほむらちゃんはまどかちゃんの……」

「確信は持てないよ。ただ、君ならどうする？」

その言葉にスカジャン青年は答えなかった。

「僕にもどうすれば良いかわからないよ」

それ以来二人は黙ってしまった。
やがて地味な青年が立ち上がり去っていった。

「わからねーよ」

地味な青年がいなくなってからスカジャン青年がそう呟いた。

第２２話「何者でもないよ」（後書き）

あいかわらずキュゥべぇが外道過ぎる。
そしてキュゥべぇ星人は絶滅して欲しいんだぜ。

第２３話「凄く邪魔なんだ」（前書き）

もう原作の面影すらねぇじゃねぇかｗｗ

最初は原作に沿ってやるつもりだったけど、かなり脱線してるな。

いやいやだからって流れを考えてないわけじゃないんで、滅茶苦茶な話にはならない。

と、思う。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第２３話「凄く邪魔なんだ」

志筑仁美はソファーの温もりに頬を埋めて、うつらうつら微睡みに意識を完全に沈み掛けた瞬間、玄関の方で音がした。
仁美はパッと目を開けて意識を覚醒させる。
すぐに玄関に向かって彼を迎える。

「鷹羽、さん？」

虎之介は思い詰めた表情で仁美を見る。
どうやら仁美の聞きたいことを聞かせてくれるらしい。

「仁美ちゃん。ちょっと話しがあるんだけど、良いかな？」

いつもの軽い感じで剽軽な虎之介ではない。
ただ真剣な眼差し。

「リビングで良いですか？紅茶を淹れますよ」

虎之介は頷いてリビングに向かう。
仁美も二人分の紅茶を淹れてからリビングのソファーに座る。

「何から話そうかな……。まずは驚かないでね」

虎之介は右腕を翳す。
すると右腕は異形の腕へと変化すり。
爪は長く、鳥の意匠が見てとれた。

「驚かないでね。それと少し気持ちの悪い話だけど……」

そう言ってから虎之介は異形の右腕を仁美に向ける。

『よう、俺はアンク。ワケあってトラの右腕に居候してるモノだ』

確かにあの時、この声がした。

仁美はその声が幻聴かとも思っていたが、今この瞬間に考えを改める。

仁美は深呼吸してからアンクを見る。

「おれさ。もう死んでるみたいなんだよね。一年ぐらい前かな。おれ、ある海岸で死んでたらしんだ」

仁美は虎之介を見るが特に変わった様子はない。

死んでいると言われても生きているようにしか見えない。

「そこにグリードっていう古代の怪人達が蘇って来て、不完全だった右腕だけのグリードがおれの身体を乗っ取ろうとおれの右腕があった場所に……」

その姿を想像して仁美は軽い吐き気を催した。

もちろん片腕だけの人間の姿に、ではない。

虎之介は言ってはいないが、右腕だけ失った死体ではなく、身体がバラバラになっていたと言うことだろう。

何となくそんな気がする。

「多分、仁美ちゃんの想像している通りだよ。話の続きだけどね。不完全なグリードは不完全なあまりに身体を修復しようとしたんだ。所がおれの意思が強かったのか、おれはそのグリードの意識を乗っ取り返して……」

虎之介の言おうとしていることがわかってしまった。

「察しが良いね。そう、おれはアンクの力でグリードとして蘇り、人ではなくなってしまったんだ。んでいろいろあってメダルの力でオーズとしてグリードと戦ってるんだ。ま、そのいろいろってのは想像に任せるよ」

仁美は信じられなかった。
目の前の青年が人ではないことを。
普通に笑ったり、泣いたり、起こったりすることが。

「仁美ちゃん。これだけは言っておくよ」

虎之介が仁美を見据える。

「人ではないからって人と同じに感情を持っちゃいけないのかな？」

仁美は答えられなかった。

「別に解って欲しいわけじゃない。ただ、そういうヤツもいるってことさ……」

『話しは終わったかトラ？なら行こうぜ。人間何かに理解出来る筈がないだろう？』

「まだ本題話してないだろ。アンクはちょっと黙ってろよ……」

虎之介は人の腕に戻す。

「鷹羽さん。一つだけ良いですか？」
仁美が虎之介を見る。
「あいよ。何だ？」
真剣な表情ではない。
いつもの剽軽な方の虎之介だ。
「鷹羽さんは、自分を人間だと思っていますか？」
その質問は愚問だった。
当たり前だと言わんばかりに虎之介は笑う。
「んで仁美ちゃん。おれから一つ頼みがあるんだが。まぁ場合によっちゃあ二つになるけどな。良いかな？」
仁美は私に出来ることならと言った。
「見滝原から逃げてくれ。何か二週間後ぐらいにトンでもねぇ化物がこの街に来るんだってよ。おれは君が好きだ。もちろん人間的にね。だからその化物が来る前に安全な場所に逃げてくんね？」仁美が困惑する。
突然そんな話をされたら誰だって困惑するだろう。
「鷹羽さんはどうするんですか？」
その質問も愚問だろう。
「仮面ライダーは平和を守るんだぜ？」

答えはそれだけで十分だろう。
だが仁美に逃げろと言った時点でそれは1つの疑問を残す。
「勝てるんですか？」
息を飲んでから仁美は言った。
「知らね。ま、おれなら大丈夫っしょ。この街には何人か他の仮面ライダーもいるらしいしね」
それでも勝てるか分からないらしい。
「最初に言っておきます。私、逃げたくありません。逃げるのなら私の友人達も一緒に……」
「ダメだよ。そしたらいろいろ都合が悪りんだ。だから仁美ちゃん一人で逃げろよ」
言ってから虎之介は気付いた。
そんなことを言ったら仁美の答えは決まってしまう。
「わぁったよ！勝手にしろッ！」
仁美が口を開く前に虎之介が諦めた。
「仁美ちゃん。友達の話を出したらこうなるってわかってたろ？」
仁美はさぁと口元を押さえる。
虎之介は仁美の策略に見事にハマってしまった。

「ならもうひとつの頼みだ。学校から帰ったら外出禁止だ。その化物以外にも化物が出るらしいしな」

もちろん虎之介にそんなことを言う権利はない。
だが仁美は現実にあれを見た。
その時点であまり外には出たくないだろう。

「……わかりました。ただし鷹羽さんも気を付けてくださいね」

『大丈夫だって。俺はトラが死ぬと都合が悪いんだ。だから死なせはしないさ』

腕が異形へと変化し、アンクが言う。

「だから勝手に出てくんなって！仁美ちゃんがびっくりするだろ！」

仁美は笑った。
まだ慣れはしないが、この二人を見てるとつい笑ってしまう。

「あ、仁美ちゃん。友達とかにもあんまり出歩かないように言っといてね」

仁美ももちろんそうするつもりだった。

「さ、今日はもう遅いから寝なさい。明日も学校だろ？」

仁美は頷いて飲み終えたティーカップを片付ける。

「あ、おれがやっとくから仁美ちゃんはもう休んで」

立ち上がる虎之介を窓の外から白い影が見詰めていた。
「あ、もしもしまどか？ごめんね。こんな夜遅くにさ」
美樹さやかは携帯を耳に充てて言った。
『うんうん。大丈夫だよ。丁度良かった』
電話の相手は鹿目まどかである。
さやかは上条恭介の退院の知らせをするために連絡したのだ。
わざわざ連絡するまでもないのだが、まどかの状況も聞いておきたかった。
「ん？どうしたのよ。また新しい魔法少女でも現れた？」
状況が変わったとすればそれが一番妥当だろうとさやかは思った。
『新しい仮面ライダーが現れたの。なんか、仁美ちゃんの知り合いの人みたい』
それは思いもよらなかった。
さやかは橘達に聞いていた。
昔戦った仮面ライダーはブレイド、ギャレン、レンゲルの三人だと。
そこまで思ってから佐倉杏子がこの街に来た理由を思い出す。
「まさか、杏子の言ってた仮面ライダー？」
『わからない。でも魔女じゃないのと戦ってたよ』

それからまどかは今日起きた出来事を話した。
それを聞いたさやかは自分を恥じた。

「ごめんまどか……。アンタがそんな大変な目にあってたのにあたしは……」

マミの言葉を思い出す。
恋愛もしている暇はないのだと。
自分がサボってしまえばその分犠牲が出る。
今回はたまたま運が良かっただけだ。
たまたま仮面ライダーが居合わせていたから良かった。
本来ならば自分が守らなければならなかった。

『さやかちゃん……』

まどかは何も言えない。
自分が言える立場ではないことを理解している。

「良いのよまどか。まどかに戦いは似合わないよ」

今さやかに言える精一杯の言葉だった。

『そ、そうかな？私だってキュゥべぇと契約すれば……』

「ダメだよ」

まどかが言い終わる前にさやかが言う。

なぜか暁美ほむらの顔が過る。

「あの転校生、きっとまどかを守ろうとしてるのかも……。理由はわからないけど、アイツは全部知ってる気がするの。魔法少女の末路や、魔女になることも」

さやかは知らなかった。
魔法少女の末路や魔女化の事も。
ただ知っていたらどんな奇跡が叶えられたとしても、なりたくない。
友達にそんな危険なマネはして欲しくない。

「だからまどかは魔法少女になろうなんて止めて。あたしは大丈夫。じゃないけど、仕方ないよ……。もう遅いから……」

少しだけ弱音が出てしまった。
まどかには言っておきたい。
自分は弱い人間なのだと。
だから支えて欲しい。
魔法少女でも仮面ライダーでもない友達に。
それぐらい言ってもバチは当たらないと思った。

『良いの。だって私に出来る事って話を聞いてあげられるくらいだし……。あ、今日は上条君はどうだったの？』

まどかはさやかが電話してきたのは恐らく上条恭介関連だろうと思い、それを問う。

「あ、そうそう。恭介のヤツ、明日退院だってさ。早ければ明後日から学校に行くって言ってたよ」

まどかはそれは良かったと言って、今日の出来事を聞こうとする。
魔法少女の仕事も大事だが、さやかは話している内についつい熱くなってしまった。
気付けば魔法少女や仮面ライダーのことなど存在しないような気持ちになってくる。
しかし忘れてもいけない。
ただこの友人を失いたくない。
自分が押し潰されそうになった時、傍にいてくれる友人達がいることはさやかにとっては大きすぎる。
だから守りたい。
まどかも、ほむらも、仁美も、天音も、杏子も、橘も、睦月も、相川始も全ての人間を救いたい。
『やぁ、意図的に仮面ライダーの前に姿を表すのは君が二人目だよ。はじめまして鷹羽虎之介。少し話がしたいんだ。出てきてもらっても良いかな？』
頭の中に響いた声は突然そんな事を言った。
虎之介はすぐに靴を履き、声のしたほうへ行く。
志筑邸の門まで出た所で白い何かが虎之介の前に姿を表した。
『僕はキュゥべぇ。わざわざ出てきもらってすまないね』
「用件は何だ？お前が魔法少女を魔女にしてるんだって？だったら……」
虎之介がオーズドライバーと3枚のメダルを出す。

『まてトラ。話ぐらいは聞いてやれ』
虎之介はドライバーを持ったまま、キュゥべぇを見据える。
「で、何だ？」
警戒は緩めない。
『実は君に頼みがあって話がしたかったんだ。単刀直入に言うよ。君のメダルを譲って貰えないかな？上手くすればエントロピーを凌駕出来るかもしれないんだ。つまり……』
虎之介が息を呑む。
アンクはそんなのは論外だと言うが、キュゥべぇの目的がイマイチわからない。
特にエントロピーを凌駕するの辺りが。
『魔法少女を魔女にしなくても僕の目的は達成出来るんだ。それと出来ればＵＳＢメモリみたいなのを持った仮面ライダーを倒してくれないかな？凄く邪魔なんだ』
そんな話は明らかにのる必要はない。
橘の言葉によれば彼等は味方の筈だ。
むしろ虎之介は彼等を知っている。
『もちろんタダとは言わないよ。君が言う通りにしてくれれば僕は志筑仁美には何も言わないよ。断るのなら志筑仁美に契約を迫ってみようかな。魔法少女になったらすぐに真実を教えれば彼女はどんな魔女になるのかな？』

やはり橘の言った通りだった。
コイツは手段を選ばない。

『メダルはやれんが、メモリの方なら奪ってやっても良いだろう』

アンクが突然そんなことを言う。
信じられないといった顔で虎之介が右腕を見る。ただアンクがメモリの名称、ガイアメモリと言わなかったのは唯一の救いだった。
名称を知っていることがバレたら彼等の正体を知っていることがバレてしまう。
そしたらそれをネタにまた脅されるかもしれない。
案外、それを計算してメモリと言ったのかもしれない。

『そうかい。なら彼女の所へ行くとするよ。交渉決裂だね』

キュゥべぇが塀の上にピョコンと乗る。
「ま、待てッ！メダルなら……」

虎之介が一瞬苦しそうな表情をして、腹部が紫の光を放つ。
そして現れた紫の3枚のメダル。

「……幻獣のメダルだ。だから仁美ちゃんには手を出すな！」

キュゥべぇが笑ったように見えた。

『おいトラッ！勝手なこと……』

アンクは諦めたようだ。

『ありがとう鷹羽虎之介。後はメモリだね。出来れば彼等を倒して

欲しいんだけど、メモリだけでも良いよ』

そう言ってキュゥべぇは去っていった。

残された虎之介は少し辛そうに膝を付く。

『馬鹿野郎。お前、あのメダルがないと生命維持がマトモに出来ないだろ』

「仁美ちゃんを巻き込むわけにはいかないよ。アンクだってアイスキャンディを沢山貰っただろ？……だったら礼はしないとな」

脂汗を滲ませ、虎之介はフラフラと立ち上がる。

『……生命維持はこっちでやってやるから好きにしろ……。ただし幻獣メダルは取り返せ』

もちろんそのつもりだ。

「ま、一回戦ってみたかったんだ。あの人とはさ……」

第２３話「凄く邪魔なんだ」（後書き）

キュゥべぇ鬼畜過ぎるｗｗ
下手すりゃ原作よりも酷いかも……。

原作なら乾巧に、じゃなくて言葉巧みに陥れる感じになるんだろうけど、書いてる俺が言葉巧みじゃないからな……。

キュゥべぇが無表情でいってる姿を想像したらガクブルしちまった。

ちなみにこの世界の仁美は魔法少女の資質はあります。
異世界の住人を助けたって因果があるんで一応資質だけはね。
ただまどかや天音の資質がデカイのでキュゥべぇがそっちを優先してるって感じですね。
仁美に声を掛けなかったのがキュゥべぇにとっては嬉しい誤算だったわけですね。

詩神でした。

第２４話「おかえり！」（前書き）

前回で重大なミスを犯したことに気付いてしまった……。

さやかの守りたいものリストに重大な欠陥が……。

ま、面白いから残しておこうかな。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第２４話「おかえり！」

「どうしたの？アナタから私を呼び出すなんて……」

暁美ほむらは少しだけ困惑していた。

確かに彼女の事は気にかけているが、彼女が呼び出すとは以外だった。

「うん。実はね、ほむらちゃんに教えておきたいことがあって……」

鹿目まどかは言う。

「昨日、緑色の怪人に襲われたの……。一応、伝えておこうと思って。ほむらちゃんの連絡先知らないから」

ほむらは更に困惑する。

あの怪人が現れるのはワルプルギスの夜が来る日だった。

尤も、あの怪人が現れる事自体がイレギュラーなわけなのだが。

思えば仮面ライダーとあの怪人が現れたのは前の世界が初めてだった。

今まではそんな存在自体聞いたことすらない。

初めての時間軸でも仮面ライダーの噂すら聞いたことがない。

この世界は不自然だ。

「天音さん。あの怪人の事は知ってるって言ってたよ」

その名を聞いたほむらは明らかに不快感を露にした。

前の世界、彼女の姿を見た。

その彼女があの怪人を復活させたように見えた。

前の世界に現れた二人の仮面ライダーの中の一人はブレイドに間違いない。
ただ空を飛ぶ形態だったらしい。
もう一人は赤い目の黒い仮面ライダーだった。
姿はよく覚えていないが、仮面ライダージョーカーだったように見える。更には途中で白い姿に変化した。
白くなったそのライダーはワルプルギスの夜を追い込んだ。
それほど凄まじい力だったが、栗原天音が現れてから状況は一変した。

「ほむらちゃん？」

名前を呼ばれほむらはまどかを見る。

「ごめんなさい。魔女以外の敵がいたのに驚いただけよ。それで、その怪人は？」

「わからないの。ただ知らない仮面ライダーが来てくれて……。多分、仁美ちゃんの知り合いの人かも」

以外な名前だった。
彼女が関わってくるときは美樹さやかが魔女になるときだけのはずだ。

「その人には会える？出来ればすぐに」

「今日、仁美ちゃんの家に行く事になったの。天音さんと始さんも一緒で良いなら……」

それはもちろん構わない。

天音がいるのが多少気にくわないが、仕方がない。
「なら仁美ちゃんに言ってくるよ。多分、魔法少女の事は知らないだろうから、お願いね」
ほむらは頷いた。
「アナタの方から声を掛けてくるなんて以外ね」
素朴な疑問だった。
出来れば彼女には何も関わっては欲しくないのだが、今は仕方がない。
仮面ライダーという駒を使いこなすにはどうしても関わりが欲しかった。
仮面ライダーブレイドである相川始に近付くには天音かまどかに接近した方が動きやすい。
「私、何も出来ないから。魔法少女でも仮面ライダーでもないから、私に出来る事ってこれぐらいだし……」
「まどか……」
ほむらは悲しくなった。
今までのまどかならば魔法少女の契約をしてしまう。
だがこの世界では魔法少女にはなってはいない。
まどかを助けたい筈なのに、まどかと一緒に戦えないことが悲しい。
彼女が魔法少女になればほむらにとって最悪な結末を辿るはずだ。
「ワルプルギスの夜っていう魔女が来るんでしょ？」

その言葉にほむらは違和感を覚えた。
ワルプルギスの夜の事は橘達に聞いているだろう。
だがなぜか違和感がある。
その違和感の正体がわからない。

思えば杏子の出会った仮面ライダーは何者なのだろう。
ワルプルギスの夜の事を知っている。
有り得ない。

「ほむらちゃん？」

声をかけられ我に返る。

「ごめんなさい。ちょっと考え事を……」

「鹿目さん？」

背後から天音の声がして振り返る。

天音と相川始がいた。

「天音さん。志筑さんの家に？」

その通りだ。
相川始も他の仮面ライダーの事が気になるのだろう。

「うん。始さんが会いたいって言うから」

始は頷く。

「じゃあ一緒に行こ？」

まどかの言葉に天音は頷いて歩き出す。

他愛のない会話をしている内に志筑邸に到着する。

まどかがインターフォンを押すとすぐに仁美が対応してくれた。

玄関から顔を出した仁美が中に案内してくれる。

リビングの扉を開けるとソファーに座った青年が顔を向ける。

「よ！ま、上がれよ。おれん家じゃねーけど」

青年の顔を見た始は驚く。

すぐにでも飛び掛からんばかりの驚きようだが、始は自制したらしい。

「……すまないけど彼と二人だけで話がしたいんだ。良いかな？」

仁美は頷いてまどかとほむらを二階の自分の部屋に案内する。

「話が終わったら声を掛けてくださいね。私達は二階にいますから」

仁美はそう言って二階に向かう。

「で、話ってなんだ？アンタも仮面ライダーなんだろ？」

その質問は白々しいと言うばかりの表情で始が口を開く。

「お前、どういうつもりだ？なぜこの街に危機が迫る事を知っている？俺にカテゴリAを渡したのは何故だ？」

その質問に虎之介は訳のわからないと言った表情だった。

「ちょっと待てよ。おれはお前のことなんて橘さんから聞いたぐらいしか知らねーし。ちょっと状況を整理しようぜ」

虎之介は言って昨日、橘と会ったことを話す。
もちろんワルプルギスの夜の件は協力するつもりだとも伝える。
それから記憶喪失の件も。
それを聞いた始は今度は自分の状況を話す。

「つまり相川。アンタにこの街の危機とカードを渡したんはおれだって言うんだな？」

始は頷く。

「だがおれはそんな事はしてない。寧ろお前なんか知らねーしな」

それは嘘だ。
虎之介は始に対して見覚えがある。
だが思い出せない。

「そんなそっくりな人間が短期間に現れると思うか？」

虎之介は首を横に振る。

「事実だろ。おれはホントにアンタにカードを渡した記憶なんかねんだよ。記憶喪失もそんな最近の事じゃねぇしな」

今、虎之介の言ってることは本当だろう。

「ま、アンタの言ってることは事実だろうからな。多分、おれにそっくりなヤツがいるんだろ。そいつが全て知ってるってことだろ。少なくともおれはカードなんか渡してねぇし、仮面ライダーオーズだ。あ、コイツも紹介しないとな……」

虎之介はアンクを紹介する。

始も最初は驚いたが、すぐに慣れた。

「お前のことはわかった。後はお前がまどかちゃん達に話をする番だな」

虎之介は頷いて仁美を呼ぶ。

話は終わったと伝え、まどかとほむらも話には交ざる。

虎之介は再び最初から説明を始めた。

「油断すんなッ！」

佐倉杏子が美樹さやかの背中に張り付いた使い魔を振り払う。

二人は背中を合わせて死角を消す。

「ごめん！助かった！」

使い魔に囲まれた二人は確実に追い詰められている。

余りにも数が多すぎる。

「ハァッ！」

杏子の槍が切り裂いた使い魔が霧状になって飛散する。
「こりゃあやべーな。グリーフシードで回復してる暇もないし」
一瞬でも隙を見せたらやられる。
「魔力さえ回復出来ればあたしが何とかするよ……」
つまりさやかは杏子に隙を作れと言うことだ。
「本当だな？なら隙を作ってやる」
杏子は槍を突き立てる。
そして魔力を集中させた。
「ロッソファンタズマ！」
杏子が叫ぶ。
それと同時に杏子の姿が５つに増える。
「杏子ッ！？」
「良いから早く！」
さやかはすぐにグリーフシードで魔力を回復する。
黒く濁り掛けていたソウルジェムが蒼い輝きを取り戻す。
「杏子戻って！」

杏子はさやかに背中合わせに戻る。

「行くよ！」

さやかが空中に無数の剣を召喚する。
ただの剣ではない。
蛇腹状に伸びた剣はクルクルと回転し、その範囲を広げていく。
回転しながらも互いに触れることはなく、スレスレに無数に回転している。

「バカ！こんなんじゃ時間稼ぎにしかならねぇぞ！」

それは違う。

徐々に回転数をあげていく蛇腹剣はやがてブーンという音が鳴るほど、まるでプロペラのような動きを見せていく。

「お前、まさか」

杏子の言葉にさやかが頷く。

「まぁ見てなって！」

さやかの言葉と同時に蛇腹剣が外側に広がっていく。
まるでプロペラ機のように使い魔達に向かっていき、刹那、使い魔達を絡めとる。
だが全ての使い魔達を捕らえたわけではない。
後方に控えていた使い魔達は未だ無傷だった。
さやかがゆっくりと両手を広げる。

「発ぜろ！」

―ボン―

ただそれだけだった。

爆風と共に殆どの使い魔達が消し飛んだ。

「まだだッ！」

それでも倒しきれなかった使い魔達がさやかに杏子に向かっていく。

―タンッ―

―タンッ―

―タンッ―

―タンッ―

―タンッ―

「え？」

銃声が響き、使い魔が飛散する。

「危ない所だったわね。でももう大丈夫」

誰かが歩いてくる。

見覚えある人影。

「そうそう、自己紹介をしないとね……」

その人影が振り返る。
「でもその前に……」
あの時と全く同じ台詞の言い回し。
さやかが憧れた理想の魔法少女。
魔法少女が高く跳躍する。
対するは数百の使い魔達。
魔法少女が両手を大きく広げ、数百のマスケット銃を召喚する。
数百の激鉄が降り、弾幕が使い魔達に降り注ぐ。
使い魔が消え、結界が消える。
魔法少女がこちらに歩いてくる。
「私は巴マミ。あなたと同じ見滝……」
そこまで言ってさやかが抱き付いてくる。
「マミさん……」
怖かった。
魔法少女の使命が。
「私も恐いよ」
巴マミがさやかの頭を撫でる。
「でもね。怖くなきゃいけないのわかる？」

さやかは首を横に振る。

「怖くなきゃ生きたいって思わないから。だから……一緒に生き残りましょ？」

頷けないさやかだが、それは否定の意味ではない。

ただ、嬉しいのだ。

「美樹さんただいま」

「おかえり！」

第２４話「おかえり！」（後書き）

マミさんおかえり！

やっぱりマミさんは魔法少女で在り続けなきゃいかんな！

詩神でした。

第２５話「お前はそれで良いのか？」（前書き）

ふとフォーゼ×まどマギを思い付いた。

インキュベーター達は最近、宇宙のエネルギーが大量に減っている事に気付く。

その原因はフォーゼがアストロスイッチを使う度に宇宙のエネルギーが消費されているからだった。

そしてインキュベーターはフォーゼに魔法少女達をぶつけるが、次第に明らかになっていくワルプルギスの夜の存在。

魔法少女、宇宙へッ！

みたいな感じで。

話は変わるけど、ネタバレ有りの話を書いてみました。

公開しないなんてことはないけど、どうするかな。

もう少し全貌が明らかになってから公開するか、すぐにでも公開して注意書き書いて読みたい人だけ読ませるか……。

意見があれば感想にでも書いてください。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第２５話「お前はそれで良いのか？」

「と、言うわけさ。ごめんね気持ち悪い話しちゃってさ。でも、話さなきゃいけないから」

鷹羽虎之介は一通りの説明を終えた。それを聞いた暁美ほむらは信じられなかった。

目の前の人物が人間ではないことにだ。

だが彼は笑い、怒り、泣く。

そんな顔が出来るのは人間しかいないと思っていた。

だがそんなことはないのだろう。

ここにいるのはグリードと呼ばれる怪人ではない。

ただの人間だ。

魔女などとは違う。

思えば今まで出会った仮面ライダー達は敵である存在の力を使っていることが多いと気付いた。

ブレイド、ギャレン、レンゲル、オーズ。

仮面ライダージョーカーと名乗った彼は何の力を使っているのかは知らなかったが、恐らく仮面ライダージョーカーもその類いなのだろう。

魔法少女や魔女とは違う。

魔法少女から魔女になることはあるのだが、魔女から魔法少女になることはない。

だが彼等の話を聞いていると仮面ライダーから怪人になることはあり得る。

そしてその逆もある。

目の前の鷹羽虎之介がそうだ。

「どうしたの？ごめん気分悪くなった？」

虎之介がほむらの顔を覗き込む。

「いえ。ただ辛い話だって……」

それを聞いた虎之介は顔をしかめる。

「まぁね。でもおれはグリードになれて良かったと思ってるよ。グリードにならなきゃアンクやみんなにも出会えなかったわけだし」

虎之介は笑う。

「お前はそれで良いのか？」

相川始が疑問を投げ掛ける。

「別に。確かに身体は化物かもしれないけど、心は人間だと思ってるよ。むしろ、人を助けたいって心を持ってるヤツみんなが仮面ライダーだったり、魔法少女だったりするんじゃねぇの？ただ、ホントの姿を誰にも見せられないだけでさ」

そこにいる全員がその言葉の意味がわからなかった。

「悪い。説明すんのへたくそなんだ。ただおれはそう思ってるよ」

また虎之介は笑う。

始は神妙な顔で何かを考えている。

「で、ここまでで質問ある？」

周りを見回して虎之介はみんなを見る。
「杏子、さっきの必殺技はどうかと……」
魔女退治の帰り道、マミの家に向かって歩いている最中に美樹さやかがそんなことを言い始めた。
「うるせぇ！あれ叫ばねーと気合いが入らないんだよッ！」
そうだとしてもあれはないわーとさやかが言う。
「それを言うならマミに言ってくれ……」
諦めたようにうつ向いた杏子を見てからさやかはマミを見る。
「マミさん……？」
マミはうつ向いて表情は見えない。
「私、魔女になりそう……」
その言葉でさやかは全てを理解した。
思えばティロ・フィナーレもそうだがそんなオサレな名前を思い付くのは一人しかいない。
「ご、ごめんなさいッ！」
「良いのよ……。美樹さんが私のネーミングセンスをどう思っているのか理解したわ……」

ため息をついたマミはさやかを見る。

「でも仮面ライダーの技はどうなの？スピニングダンスにバーニングディバイト、ブリザードクラッシュよ？しかもカードでコンボとかどれだけ厨二なの？確かにカードの性質上、仕方がないかも知れないわよ？でもそれだったらわざわざ電子音にすることなくない？そもそも変身シーンとかカッコイイじゃないッ！私達魔法少女なんて一瞬よ？体が光って服が変わるだけじゃない！それに対して仮面ライダーはターンアップやらオープンアップやら意味が解らないじゃないッ！？それに電子音もカッコイイじゃない！それなのに魔法少女は変身シーンは一瞬、魔法使うのも一瞬よッ！クルクル回って変身しても良いでしょ！必殺技ぐらい叫んだって良いでしょ！それなのに美樹さんはそんなことも受け入れられないの？見てよ私のソウルジェムを！絶望したわッ！美樹のせいで絶望したッ！黒く濁りきりそうよッ！大体、暁美さんも無愛想なのよッ！もっと必殺技とか叫びなさいよ！変身シーンは裸になったりクルクルと回ったりしなさいよッ！杏子ッ！貴女もそうよ……」

まだ続けようとするマミを二人は制す。

「わかったから！今度から必殺技叫ぶから落ち着けって！」

杏子の言葉にマミはやっと落ち着いたようだ。

「私がどうかした？」

ギョッとして三人が振り向くと暁美ほむらが立っていた。

「誰が無愛想なの？」

ほむらはいつもの凛とした表情だった。

「貴女も必殺技叫びなさいって話よ」

そんな話はしてない。

杏子もさやかもそんなツッコミをしたかったが、あえてしなかった。

「その必要はないわ。叫んだってダメなものはダメだったりするのよ？」

その言葉は重いように聞こえた。

「ねぇほむら。アンタやっぱりまどかを……？」

その言葉から察したのか、さやかはほむらには何かあると感じたのだろう。

「美樹さやか。アナタには関係ないことよ」

さやかはむっとなる。

「だってアンタとっても苦しそうなんだもん。出来ることならアンタに力をかしたい。でもアンタが助けてって言わないと……」

さやかの言葉に杏子が割り込んでくる。

「何なのか知らねぇけど、お前は何でアタシの名前知ってたんだ？その事とさやかが言ったことは関係あんのか？」

ほむらは違うとだけいった。

だがそれは嘘だろうと三人は感じた。

「確かに貴女の事が不思議で気になってたわよ。何で私があのお菓子の魔女に殺されるのを知ってたわけ？あの時、貴女は必死に止めようとしてたわよね」

確かにそれは不思議だった。

「もしかして貴女の願いって……」

マミが言おうとするが、何故か止める。

「いいわ。貴女が話してくれるまでは私からは何も言わないわ」

マミは言ってからほむらも自分の家に誘う。
紅茶でも飲んでいかないかとの誘いだった。
ほむらの答えはｙｅｓだった。

三人が歩き出すが、なかなか歩き出さないほむらをさやかが見る。

その表情はとてつもなく悲しそうな笑みを浮かべていた。

第２５話「お前はそれで良いのか？」（後書き）

ほぼ同時刻にほむらが二人ッ！？

どっちが偽者なんだ……。

第２６話「それが切札か？」（前書き）

今回はいろいろと謎が明らかになる回っぽいですはい。

魔法少女あまね☆マギカＨｅａｒｔ始まるよ！

第２６話「それが切札か？」

見滝原の駅前の喫茶店。橘朔也と青年が向かいで座っている。

「やっぱりこの世界にも存在はしてるみたいだな……」

目付きの悪いスカジャン青年が呟く。

その姿は鷹羽虎之介そのものだった。

「あぁ、確かに封印はされている。アンデットが封印されていた場所にその記述があったからな」

そう言ってコーヒーを一口だけ飲む橘朔也。

「しかし、これをワルプルギスにぶつけるとなると必要になるのは……」

橘は俯く。

「生け贄か。俺の世界のコイツはアンデットが残り五体になった時にランダムに与えられる力だったんだけどね。あの時はアルビノジョーカーに与えられて大変だったんだぜ」

青年はその時の事を思い出す。

たった一人で挑んだ邪神との死闘を。

もしあの時、彼が現れなければ良くて相討ちだっただろう。

「生け贄が必要ってんならこの作戦は使えねぇな」

橘もその意見に頷いた。

誰も犠牲は出さない。
魔法少女も、仮面ライダーも。
「魔法少女を助ける方法は見つかった。賭けだけどな。ま、後はワルプルギスの夜を倒せば解決出来るんだけどな」
それは嘘だった。
ワルプルギスの夜よりも厄介な敵が現れるのは確定している。
「本当に一人で戦うつもりなのか？」
橘の言葉に青年は頷く。
「こっちはこっちの問題だからさ。そいつが生まれたのは俺達の責任だし」
青年はため息をついた。
「それにこっちに戦力を割くわけにはいかねぇし。前回や前々回は何とかなったけど、今回は桁が違いすぎるだろうし……」
「前回はどうやって倒したんだ？参考までに聞いておきたい」
「序盤は俺のジャックフォームとアイツのジャックフォームだったかな。んで俺の切札を使って押してたんだけどさ……」
今回はその切札が使えないと言う。
「でもこっちにももう一つ切札がある」

青年は橘に黒いメモリを見せる。
【M】と書かれたメモリの文字をくるりと反転させる。
【W】に変化したメモリの色が微かに青みを帯びる。

「それが切札か？」

青年は頷く。

「このT2リバースメモリ。普通のメモリはさ。1つのメモリに1つの記憶を内包してるんだけどさ。これは2つの記憶を内包してるのさ。まぁ俺の持ってる【ラウズ】メモリは例外みたいなもんさ」

橘は【W】メモリを手に取る。

「興味深いな。一度じっくりと研究してみたいな」

「それは勘弁してくれ。インキュベーターにデータは残したくねんだ」

橘は冗談だと言って笑う。

「そういやキバットはどうしてる？」

「彼には今、上条恭介君に付き添ってもらっている。また病院に魔女が現れるかもしれないからな」

それはないだろうと青年は思うが、そのことに何も言わない。

青年は手のひらを見る。

そこには白い薔薇の紋章が刻まれていた。

「じゃあ橘さん。準備のほうはよろしく頼むぜ」

そう言って青年は立ち上がる。

「今度はムッキーにも会わせてくれよな」

第２６話「それが切札か？」（後書き）

さて今回で明らかになったのは……。

彼等は二回、ワルプルギスと戦ってるってことです。

あとはサイクロンメモリを持っていないユウが何故サイクロンジョーカーの技が使えたのか。

Ｊを逆にするとＣに見えなくもない……。

と思う。

詩神でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1084u/

魔法少女あまね☆マギカHeart

2011年10月29日02時05分発行